

アマタブ・ゴーシュの『ガラスの宮殿』論

— 英領インド軍将校アルジャンは、
何故インド国民軍に加わったのか？ —

加 藤 恒 彦

目次

はじめに—ゴーシュの世界と日本の近代化の接点

本論

- I マンダレー陥落とビルマのイギリス植民地化、王の家族のインドへの幽閉
—第一世代の物語の概要— …………… (20)
- II 海外でのもう一つのインド独立運動とインド国民軍の結成、
日本の大アジア主義との関係
—第二世代の物語の歴史的背景とその意義を巡って …………… (25)
- III ウマのアメリカでのインド独立連盟との出会いと、日本、マラヤ、ビルマを
経てのインドへの帰還の物語 …………… (30)
- IV 英領インド軍将校となったアルジャンの転換の軌跡 …………… (41)
- まとめ …………… (77)

はじめに

ゴーシュの世界と日本の近代化の接点

アマタブ・ゴーシュの『ガラスの宮殿』(*The Glass Palace* 2000年)(以下、『宮殿』)は、インド、ビルマ、マラヤを跨ぎ、19世紀末から1996年までの約1世紀の時代を背景とした、インド人、ビルマ人、中国系華僑の三つの家族の三世代に渡る物語を描いた歴史小説である。

『宮殿』は、『煙の河』(*River of Smoke*, 2011年)と同様に、国際的な広がりを持った世界的に重要な出来事を描いているだけではない。その出来事が、幕末から明治維新を経て、西欧化・近代化の道を突き進んだ日本の歴史の幾つかの重要な転換点とも直接・間接に関係して

いるのである。

イギリスによる、広東（広州）を舞台とするアヘン貿易を描いた『煙の河』と、その結果起きた第一次アヘン戦争（1840-1842年）を描いた『炎の洪水』（The Flood of Fire, 2015）は、かつての世界の大国、中国の清王朝が、産業革命を果たし、その産業力、軍事力を背景にした大英帝国の非道に惨めに屈する姿を描いた。

それらの小説を読みながら、筆者は、幕末の侍たちが、中国からの文献や中国商人を通じ、アヘン戦争の顛末を知ったときに感じたであろう西洋の脅威を実感し、この危機意識こそ、尊王攘夷運動を経て日本を封建体制から抜け出させ、西洋的近代化への道に駆り立てた精神なのであろうと痛感したのである。

そして、本論で論じる『宮殿』では、アジアで初めて近代化に成功した日本が、ヨーロッパ諸国による植民地支配のもとにあったインドや東南アジアの人々に与えた直接・間接の政治的インパクトが描かれる。すなわち、『宮殿』の第一世代の物語では、日露戦争における日本の勝利の知らせが世界を駆け巡り、西洋諸国の植民地下にあった国々の人々に大きな希望を与えるなかで、英領インドに幽閉されたビルマの王が、インド人官僚に、これがこれからの世界の流れになるとは思わないか、と挑発的な発言をするエピソードが描かれる。そして、それに続く第二世代の物語では、真珠湾攻撃と同時に行われた日本軍によるマレー侵攻によりイギリス軍が潰走し、日本軍の庇護の下に、インド独立連盟が、敗走する英領インド兵を組織し、イギリスからの独立の為に闘う第一次インド国民軍が結成され、第二次インド国民軍に引き継がれて行く過程が描かれ、大英帝国の時代の終焉を告げるのである。

本論では、このように、日本との関わりの深い第一世代と第二世代が生きた時代の物語に絞り、論じられることの多い第一世代の物語については、その概要を整理するとともに、論考の対象を第二世代の物語、とりわけ、英領インド軍の将校に自ら選んで成ったものの、多くの内面的葛藤と自己否定を経て、第一次インド国民軍に参加し、インドの独立を求め、イギリス軍と闘い、悲劇的な死に至るアルジャンの「気づき」の物語に絞り、その過程を検討してみたい。

本論

I マンダレー陥落とビルマのイギリス植民地化、王の家族のインドへの幽閉 —第一世代の物語の概要—

大英帝国の植民地支配に利用される英領インド軍

物語は、1885年、イギリスが、ビルマのチーク材開発に乗り出そうとするが、ビルマ王に反対され、イラダティ河を軍艦で遡り、首都マンダレーに軍事侵攻してくるという事件によって始まる。そして、その冒頭の部分には、第二世代の物語のテーマとも関連する、極めて印

象的な場面が描かれている。

それは、上陸したイギリス軍が、ビルマの群衆に混じった当時 11 歳のインド人の少年、ラージュクマールの目の前を行進する場面である。

二名の騎馬兵が先頭に立ち、群衆に道をあけさせ、その後にぎっしりと隊列を組んだ兵隊たちが行進する。兵隊はライフル銃を肩にかけ、無表情のまま、前を向いて行進する。観衆の誰かが「イギリス人だ！」とささやき、それが口伝えに後ろに広がり、静かな歓声に変わる。

しかし、前衛部隊が通り過ぎ、次の部隊が視野に入ってきたとき、観衆は驚きのあまり黙り込んでしまう。その兵隊たちは、イギリス人ではなく、インド人だった。ラージュクマールの周りの人々は、インド人の彼に聞く。

「この兵隊は何者だ？」誰かが尋ねた。

「知らない。」

ラージュクマールは、その日、いつも市場で見かけるインド人たちを、今日は一人も見かけなかつたことに気づいた。(TGP, p.29)

こうしてラージュクマールは、この後、数人のビルマ人の男に取り囲まれ、路地裏で暴行を受ける。

ゴーシュは、小説の冒頭で、大英帝国が、その軍事力によりビルマを力でねじ伏せる歴史的瞬間を描きつつ、隣国のインド人が、そのような帝国主義的行為に加担しているのを知ったビルマ人が、その驚きと怒りを幼いインド人少年にぶつける場面を描いているのだ。

他方、ゴーシュは、ビルマ人の民族意識の象徴であった王と王妃が、イギリス支配への民衆の反抗の絆となることを恐れたイギリスが、王と王妃を少数の侍女とともに南西インドの海岸に面したラトナギリの町に幽閉し、王の死まで 20 数年に渡り管理下に置く物語を描いて行く。

イギリスによるビルマとマラヤの植民地経営の狙い

イギリスのビルマ植民地化の狙いは、高級木材として有名なチーク材の開発事業による富の獲得にあった。すなわち、ビルマの高温多湿の森林地帯に生育するチークの木を伐採・乾燥させ、筏に組、二つの河の合流点であるマンダレーまで運び、これを「アジアのシカゴ」とも言うべき商業都市として開発しようとしていたのだ。

さらにイギリスは、すでに植民地化していたマラヤで中国系華僑が発見したゴムの木にも目を付け、南インドの貧窮した農村からインド人斡旋業者によって集められた労働者を使用し、ゴム農園開発にのりだす。自動車時代を迎え、やがて第一次大戦に突入する時代において、ゴムは、自動車生産に不可欠な素材として巨大な富の源泉となったからである。

ゴーシュは、イギリスが、ビルマ王朝の主権や民族の誇りを蹂躪し、富を追及する強引なやり方を描きつつも、象を森林の開墾、チーク材の運搬、河川の流木の除去等に利用する等それまでビルマ人が思いもつかなかった形で木材資源開発に利用する等、その創意工夫を評価している。また、若いイギリス人が、ビルマのジャングルの中かで、マラリアやデング熱に晒され、望郷の思いに苛まれながらも、チーク材の伐採を指揮する姿も描いている。

また、ゴム園の経営において、インド人移住労働者が、かつてのアメリカ南部の黒人奴隷制度を想起させるような形で労働させられる姿も描いている。

ゴーシュは、この当時、ビルマやマラヤ人の生活水準が、インドの農村よりはるかに豊かで、識字率も高かったため、ビルマやマラヤの人々がしがたがらない厳しい労働に従事させるべく、インド南部の農村労働者が集められたのだと指摘している。

華僑やインド人ビジネスマンのビルマやマラヤでの成功

さらにゴーシュは、ビルマの中国系華僑やインド人が、イギリス人による植民地経営に付随するビジネスを足場に富を蓄え、本格的に、ビジネスの世界に進出する姿も描いている。中国系華僑のサヤ・ジョーンズは、チーク材を切り出す森の飯場への物資の運搬・供給で富を蓄え、やがてマラヤの山のなかに土地を買い、モーニングサイドという名のゴム農園の経営に乗り出す。サヤ・ジョーンズは、インド生まれの孤児で、ラングーンに船員見習いとして辿りついたラージュクマールを可愛がり、ビジネスを教えこむ。野心に燃え、才覚に恵まれたラージュクマールは、ビルマの油田開発の現場にインド人労働者を斡旋する仕事で資金を蓄え、自ら材木業に乗り出す。そして、ビルマの鉄道会社に木材を提供する大口の契約の受注に成功し、ビルマで有数の金持ちとなる。

ラトナギリの物語—インド人エリート官僚の挫折と悲劇

他方、ビルマの王と王位が、ラトナギリに幽閉され20年余の年月が過ぎた20世紀の初頭、それまでのイギリス人コレクター（その名の通り徴税官であり、同時に地方行政を司るインド植民地政府の高級官僚）に代わり、インド人のコレクターが妻を伴って着任する。

18世紀中盤、ムガル帝国を倒し、インド経営に乗り出した東インド会社は、インド統治のために、インド総督のもとに「鉄の杵」と呼ばれた、強固な行政・官僚組織（Indian Civil Service）を作りだし、そのトップに座るイギリス人を、本国での難関のインド高等文官試験制度により選抜していた。そして1857年のセポイの反乱の後、東インド会社に代わり、イギリス政府が本格的にインド統治に乗り出すと、インド人の新中間層を対象に高等教育制度を整備し、優れたものはイギリスの大学に受け入れ、インド国民会議等、インド人の強い要望で、公務員試験による登用の機会を与えたのである（この当時、インド人高級官僚は全体の5.4%

程度と言われている）。（本田、2001年、pp.24-25）これはインド人エリートを、インド支配の仕組みに取り込む手法の一つであった。

新任のコレクターとして赴任したインド人官僚ベニ・プラサド・デイ（Beni Prasad Dey）は、カルカッタ大学で優秀な成績を上げたため、近所の裕福な人たちが毎月出し合って貯めていた寄付金で、ケンブリッジ大学に学び、インド高等文官試験に合格し、誉れ高い帝国のインド植民地政府官僚となった優秀なインド人である。

夏目漱石のロンドン留学体験

日本人として興味あることは、デイがイギリスの大学で学んだ時期は、夏目漱石が、文部省から派遣されロンドンに留学した時期（1900年から1903年にかけて）とほぼ一致していたことである。

漱石がロンドンを訪れたのは、大英帝国がボーア戦争に勝利し、南アの富を手中にし、インドや中国や他のアジアの国々を植民地、半植民地支配の下においていた時期であった。

或る日、ボーア戦争からの義勇兵がセント・ポール大寺院に向かう凱旋行進を見た漱石は、「自ラ戦端ヲ啓キ 自ラ幾多ノ生命ヲ殺シ 自ラ巨万ノ財ヲ糜シ 而シテ神に謝ス 何ヲ謝セントスルヤ 馬鹿々々シキコトナリ」と書き残している。（ノート 1902年6月1日の記述、NHK ETV特集 2016年）ここに漱石の大英帝国の戦争への醒めた批判的意識を見ることができよう。

漱石は、ロンドン大学での講義に出席なくなり、独学していた頃書いたノートのなかで、「日本ハ西洋ニ圧迫セラレツツアル」「文芸ノ事ニ於テ 余ハ余ガ日本人トシテノ立脚地ヨリ此圧迫ニ反抗セントス」と書き残し、日本人の文学者としての心意気をしめしている。（ノート 生存競争、NHK ETV特集 2016年）

また、漱石は、ロンドンの中国人を蔑視する風潮に反感を覚え、「支那人ハ嫌ダガ日本人ハ好ダト云フ」「之ヲ聞キ 嬉シガルハ 世話ニナツタ隣ノワルグチヲ面白イト思ッテ・・・軽薄ナ根性ナリ」と述べ、日本が多くを学んできた中国に、同じアジア人としての共感を持ち、イギリスに媚びへつらう日本人に違和感を覚えたのであろう。

漱石は、後に、『三四郎』のなかで、イギリスのような国になることを目指し、ロシアとの戦争の勝利に湧く日本の風潮にたいし、太田先生をして日本は、「滅びるね」と言わしめたのには、そのようなロンドン体験があったのであろう。（NHK ETV特集 2016年）

インド人官僚のイギリス崇拜

では新任コレクターは、イギリスにどのような態度を取っていたのか？デイは、漱石とは逆に、インド人としての劣等感とイギリス崇拜（Anglophile）の心性を持ってインドに戻ってき

たのである。そして、同じくカルカッタで育った新妻のウマを連れ、ラトナギリに赴任する。新妻のウマは、考古学教授の娘として生まれ、インド的な、保守的で家に縛られた妻ではなく、ヨーロッパ風の、近代的で社交的な生活様式を身に着けることに抵抗しない若い女性だったので、結婚相手に選ばれたのだ。(TGP, p.169)

コレクターの職務はこの地域の行政を司りつつ、ビルマ王室をイギリスの管理の下に置くことであった。着任したばかりのコレクターが、ビルマ王の屋敷を始めて訪れたのは世界中がアジアの国、日本が、ヨーロッパの大国ロシアに勝利したニュースに湧きかえっていた時であった。王は、日本の勝利がアジアの未来を示しているのでは、とコレクターを挑発し、気色ばんだコレクターが、大英帝国の偉大さを弁護したため、一気にその場の空気が凍りついた瞬間、それを和やかな雰囲気に変える機転を発揮したのはコレクターの妻のウマと侍女のドリーであった。そして、それをきっかけにウマと侍女のドリーの間に友情が生まれるのであった。(TGP, pp. 114-115)

ラージュクマールのラトナギリ訪問とドリーとの結婚

次にゴーシュは、ビルマのラージュクマールの物語と、インドのラトナギリの物語を合流させる。今や、ビルマで大金持ちとなったインド人ビジネスマン、ラージュクマールが、ドリーに会う為にラトナギリを訪問するのである。

ラージュクマールのラトナギリ訪問は、20年前のイギリス軍によるマンダレー侵攻に遡る。当時11歳のラージュクマールは、イギリス軍がやってくる直前の混乱したビルマ王朝の王宮「ガラスの宮殿」で、ビルマ王朝に仕える侍女で当時10歳のドリーを見かけ、その美しさに心を奪われたのである。そしてラージュクマールは、いつの日か成功し、彼女を迎えに行くという夢を心に秘め、ビジネスの世界で成功したのである。そしてビルマに住む、或るインド人ビジネスマンが、ウマの叔父にあたることを知り、その叔父の伝手でラトナギリにやってきたのだ。ドリーとの再会を果たしたラージュクマールは、熱烈にドリーに求婚し、ラングーンで家庭を築くことになる。やがて二人の間には、ニールとディヌという対照的な二人の息子が生まれる。ニールは父親の後を継ぎ材木業に入るが、ディヌは、内省的で芸術、とりわけ近代に入り新しい展開を見せた芸術写真の分野に魅力を感じるようになる。

第一王女の妊娠とコレクターの自殺

ラージュクマールがドリーを連れてラングーンに去った後、ラトナギリで起きた次に述べる事件により、物語は新たな展開を見せる。コレクターのデイが、单身ボートで外海に漕ぎ出し、波に飲まれ死んでしまうのである。その真相は自殺であった。デイを自殺に追い込んだのは、第一王女がインド人の馬丁の若者の子供を妊娠したことにあった。人種やカースト制度による

インド人の分断を政策としていたイギリスの植民地政策にとって、王女と低いカーストのインド人との結婚と、そこから生まれるであろう、異人種とカースト間の混血児は、スキヤンダルと見なされたのだ。そして、コレクターは管理責任を問われ、ボンベイの閑職に左遷されることになったのである。しかも、妻のウマは、事を秘密にして欲しいとドリーから頼まれ、王女が妊娠したという事実をコレクターには伝えてはいなかったのだ。

コレクターは、彼の左遷を告げる手紙がボンベイから届いた日、妻のウマに、20年間の先任者の怠慢から起きた事態の責任を自分一人に負わされた、と不満をぶちまけるのだが、その日は、ウマが、離婚を決意し、カルカッタの実家に帰ると言った日でもあったのだ。(TGP, p.184)

ではウマは、夫のコレクターをどのように見ていたのか？コレクターは、ウマとの会話のなかで、イギリス人の上司をいつも「私の先生」と呼び、たえず、イギリス人の同僚に自分の欠点を指摘される恐怖感に取りつかれ、自分が劣っているとみられないために、イギリス人が決めた規則や作法の遵守一点張りの堅苦しい性格の人間になってしまっていて、ウマにも、コレクターの妻としての理想的な振る舞いを求め、逐一彼女の作法や振る舞いをチェックし、奔放で解放的な性格のウマとの間には、本当の尊敬と慈しみの感情が育っていなかったのである。それでいて彼は同世代のインド人の模範とされていた。それを見てウマは、未来のインド人は皆彼ようになるのだろうか、と思っていたのである。(TGP, pp. 198-199)

時代の転換期

コレクターが自殺した時期は、インドの優れた人材が、支配者であるイギリス人を模範とし、その統治機構の一員として認められることを目指した時代からの転換期に当たると言えよう。何故なら、この時代のインドには、ガンディーやネルーのように、同じくイギリスの大学で学びながらも、植民地体制に反旗を翻し、インド国民会議に参加し、自己犠牲を厭わず独立の大義に一生を捧げようとする新しい世代の人々が、続々と生まれ始めていたからである。

Ⅱ 海外でのもう一つのインド独立運動とインド国民軍の結成、日本の大アジア主義との関係

—第二世代の物語の歴史的背景とその意義を巡って

ウマの新たな人生—インド独立連盟との出会いとインドへの帰郷

コレクターの死は、妻のウマにとっても、新たな人生の始まりを意味していた。ウマは、カルカッタの実家に一時期身を寄せるが、ヒンドゥー教によって定められた未亡人の惨めな余生を拒否し、夫が残してくれた財産や年金で、イギリスに旅をする。彼女はまだ28歳で長い人

生が前途に広がっていたのである。1907年の頃である。そしてイギリスからアメリカのニューヨークに渡ったウマに、新たな人生の道をさし示したのがインド独立連盟の掲げる理念と運動であった。ウマはその運動に献身的に参加し、世に知られるようになり、50歳になった1929年に、余生をインドで過ごすべく、カルカッタの実家に戻ってくるのである。

第二世代の人々

こうした第一世代の物語を土台に、第二世代の物語が始まるのであるが、本論における主要なテーマを担うウマの甥のアルジャンの物語に進む前に、第二世代の他の登場人物を紹介しておこう。

ラージュクマールとドリーとの間に生まれたニールとディヌという対照的な二人の息子のうち、外交的なニールは、父の後を継ぎ、ラングーンで木材関係のビジネスマンになるが、次男のディヌは、知的で内向的性格で、ラングーン大学に進み、政治的には左翼の立場に立ちつつ、スティグリッツ等の近代写真芸術に関心を深めて行き、後にその分野で名を残す。

ラージュクマールは、ビルマ人のドー・セイとビジネスパートナーとなり、その息子のレイモンドは父親の片腕となる。

サヤ・ジョーンズの息子で、アメリカに留学していたマシューは、アメリカ人女性エルザとマラヤで結婚し、モーニングサイド・ゴム農園を父の後を継いで経営することになり、アリソンという美しい娘が生まれる。父にマラヤの財産の処分の交渉を頼まれたディヌは、マラヤのサヤ・ジョーンズのゴム農園を訪れ、そこで出会ったアリソンとの間に恋が生まれる。しかし、第二次大戦直前、軍人としてマラヤに派遣され、近くの基地に駐屯したアルジャンもアリソンに興味を抱き、三人の間には一時、三角関係が生まれる。

カルカッタの実家に戻ったウマを迎えたのは、甥のアルジャンと姪のマンジュである。アルジャンは、英領インド軍の将校となる道を選び、マンジュはニールと結婚する。こうしてニールとディヌ、アルジャンとマンジュ、そしてアリソンが、三つの家族の第二世代を形成することになる。

第二世代の人々と第二次世界大戦—インド独立連盟と日本軍の連係とインド国民軍の結成

第二世代の若者たちが青春期を過ごし、やがて世にでる1930年代から1940年代の中盤の時期は、アメリカ発の世界恐慌に襲われ、日本が満州事変（1931年）から日中戦争（1937年）、さらには1941年暮れの日米開戦に突き進み、1945年の終戦に至る戦乱の時期であった。

この時期、大英帝国は、ヨーロッパにおけるナチス・ドイツを始めするファシズム勢力と、八紘一宇のスローガンを掲げ、東南アジアに侵攻した帝国日本の軍事拡張路線という二つの脅威に直面し、帝国内部においてもインド国民会議に指導された非暴力的独立運動の大きな発展

に直面する。

こうした世界的情勢のなかで、第二世代の人生を巻き込んでいくことになる、次の二つの動向が重要である。その一つは、イギリスの諜報機関の追跡を逃れ、アメリカの西海岸に渡った元インド兵の間に発し、東南アジアに住むインド人の間に広がったインド独立連盟の運動と、もう一つは、第二次大戦勃発に伴い、マラヤに派遣された大英帝国インド軍内部で生まれた反乱の動きである。

この二つは、1941年12月の日本軍によるマレー侵攻の開始と、それに続く、イギリス軍の潰走、1942年2月のシンガポールの陥落とともに一つに結びつく。すなわち、インド独立連盟に指導され、モハン・シン大尉の指揮の下で、インド独立を目指し、イギリス軍と戦うインド国民軍（Indian National Army）が、日本軍の庇護の下で結成されるのである。

歴史上、インド国民軍は、1942年12月に一度解散されるが、1943年7月にはカリスマ的な独立運動の指導者、スバス・チャンドラ・ボーズを指揮官に迎え再興される。ボーズは、インド国民会議の議長を二度勤めながらも、イギリスの植民地主義とのより激しい対決姿勢と独立後の社会主義的政策においてガンディーと対立する立場を取ったため、指導部から身を引き、かつ、イギリスによる弾圧の下で、カルカッタで自宅軟禁状態に置かれるが、密かに逃亡し、アフガニスタンを経由し、ドイツに亡命し、ドイツ軍と日本軍の協力を得、潜水艦でシンガポールに向かい、日本軍の捕虜となったインド兵や東南アジアのインド人を組織し、第二次インド国民軍を編成するとともに、臨時インド政府を立ち上げ、インド国境に近いビルマのインパールやコヒマで日本軍とともに連合軍と戦うが、敗北を喫し、その後、インドの独立へのソビエトの協力を得ようとし満州に向かう。しかしその途中、台北空港発の日本軍の飛行機の離陸時における事故で亡くなった、あるいは行方不明となったとされている。（Bose, 2011, Baski, 2016）

インド独立の為に、日本軍の諜報機関との連携のもと行われた、この東南アジアにおける武装闘争は、インドの独立後首相となり、非暴力抵抗運動によって独立を勝ち取ったとするネルーの下で書かれた歴史においては、これまで無視されてきた。（Baski, 2016, p.）だがゴーシュは、『宮殿』において、あえて、そのような闘いを、第一世代と第二世代を結びつける物語として大きく取り上げている。

すなわち、第一世代のウマは、すでに述べたように、アメリカに移住し、インド独立連盟の活動と出会い、それに身を投じるのだが、ウマの甥のアルジャンは、大英帝国の植民地支配を支える帝国インド軍の将校という、ウマとは正反対の道を選ぶかに見える。しかし、1941年、日本軍によるマラヤへの侵攻が予想されるなかで、アルジャンは、生まれて初めて海外のマラヤに派兵され、海外においてどのようにインド兵が扱われ、見られているかを体験し、祖国インドや英領インド軍の客観的な姿に目覚めて行き、それまでの自分の存在を支えてきた見方や

価値観の転換と自己否定を強いられ、大英帝国に反旗を翻し、インド独立連盟の思想的影響を受けて設立されたインド国民軍に加わり、大戦終結直前まで、ビルマでの連合軍との勝ち目の無い闘いのなかで、死を選ぶ姿を描いているのである。

では、ゴーシュが描いているそのような歴史的局面が持っていた意味を、その後のインドの独立との関連で、どのように評価すればよいのであろうか？

インド独立の決定的要因としてのインド軍の反乱

この点に関し、2016年1月の*India Today*に掲載された記事が極めて興味深い。この記事は、英領インド軍の反乱が、インド独立の決定的要因であった、とする新たな歴史書 *Bose: an Indian Samurai* を紹介したものである。以下、長くなるが、その記事の内容を紹介する。

その歴史書の著者、バクシ将軍 (General GD Bakshi) によると、インドの独立をイギリスが承認した1947年当時、イギリスの首相であった労働党のクレメント・アットレー氏が、1954年のインド旅行の際、カルカッタの高等裁判所の首席判事で、当時、西ベンガル州の知事代理であったチャクラボルティ氏 (PB Chakraborty) の知事公邸に二日滞在した折、チャクラボルティ氏との会話の記録から、明らかであるという。

チャクラボルティ氏は、次のように語っている。

我々は、イギリスがインドから立ち去るという決定に影響を及ぼした真の要因について長い議論を行った。私が、ガンディーの「イギリスはインドから去れ運動」が尻すぼみとなり、他に大きな問題もなかった1947年当時、イギリスは何故、急いでそのような決定を行ったのか、と聞いた時、アットレーは、「最も大きな要因は、スバス・チャンドラ・ボーズの軍事行動の結果、インド陸軍と海軍のイギリスへの忠誠心が失われたことだ」と答えたという。そして「ガンディーの与えた影響はどの程度であったのか、という私の質問に・・・アットレーは、口を皮肉で歪めながら『最小限だった』と答えた」と言う。(Baski, 2016, p.)

アットレーの主張を理解するためには、1945年の終戦の時期に遡る必要がある。終戦後、・・・ボーズのインド国民軍に参加した将校たちは軍事法廷にかけられた。すると大英帝国インド軍の兵士の間で怒りの声が上がった。1946年の2月に78隻の船の2万人近い海兵が帝国に反乱を起こした。水兵たちは、ムンバイをボーズの写真掲げて行進し、「インド万歳」というインド国民軍のスローガンをイギリス人に叫ばせた。反乱に立ち上がった兵士たちは、英国国旗を彼等の船から降ろさせ、イギリス人の命令を聞くことを拒否した。似たような反乱は、空軍でも、ジャバルプール の陸軍部隊でも起こった。イギリス軍は恐怖に襲われたのだ。第二次大戦の後、二百五十万人のインド兵が退役した。当時、インドには4万人のイギリス兵しかい

なかった。そのイギリス兵は祖国に帰る日を心まちにしていた。そのような兵力で250万人のインド兵と戦う等ということは不可能であったのだ。（Kanwal, 2016）

しかし、すでに述べたように、バスキによれば、インドの独立後、首相となったネルーは、ガンディーの非暴力抵抗運動こそがインドの独立の原動力であったという立場を鮮明にし、ボーズの路線の意義については黙殺してきたのである。（Baski, 2016, p.）

そして、ガンディーの非暴力主義・抵抗運動によってインドが独立を果たしたという説は、今では定説として受け入れられ、そしてそれがアメリカ黒人の公民権運動や南アにおける反アパルトヘイト運動を指導した原理として現代においても受け継がれている。

事実、ガンディーやネルーに率いられたインド国民会議は、広く国民の支持を得ていたし、その存在が無ければ、独立後のインドの国家としての発展もあり得なかったことは明らかである。

同時に、インド軍内部の反乱が、イギリスがインドを手放すという最終的判断の決定打となったことも事実であろう。そして、そのような観点からインド史を見直すことによって何が見えてくるのか、それが本論のテーマでもある。

ゴーシュは、後に見るように、暴力的反乱こそがインドの独立をもたらす方法であると信じていたウマが、ビルマにおけるサヤ・ジョーンズの暴力的反乱の失敗を見た後、非暴力抵抗運動を唱えていたガンディーの思慮深さを認識するという場面を描いている。

ウマのそのような判断は、大英帝国の近代的な軍事力に対し、武装した民衆による蜂起は無力であるという認識に基づいていた。だが、ゴーシュが、描いているのは、その近代的軍事組織自身が、帝国に刃を向けるに至る過程であった。それをアットレーは、インド軍兵士、とりわけ教育のある将校の間で帝国への忠誠心が失われた、と表現した。そしてゴーシュが描いているのは、その忠誠心が失われて行く過程なのである。

だが、それは同時に中国を侵略し、天皇制の下にアジアを統一しようと言う日本の帝国主義的軍国主義との共同という形を取ったために、独立という大義の為には、手段を選ばなかった、という倫理的問題が存在した。だからこそ、だと筆者には思われるのだが、ゴーシュは、日本軍とインド国民軍との間の関係については、深く触れようとはせず、インド人将校の間でのイギリスへの忠誠心の喪失に重点を置いて描いているのであろう。

だが、この問題は、日本人の立場から見れば、戦前の日本の右翼の大アジア主義をどう評価するのか、という今なお大きな政治的問題にも深く関わる。従って、筆者は、本論で、ゴーシュがあえて触れなかったインド独立連盟と大アジア主義との関係についても言及して行きたい。

本論では、そのような観点から、第一世代のウマが、彼女の新たな人生の模索において、どのようにしてインド独立連盟の運動と出会い、何故、それに人生を捧げたのか、また、ウマとラージュクマールとの間の、イギリスのビルマ支配への見方の違いや、ディヌが代表する当時

のビルマの左翼の第二次大戦を巡る情勢の見方、等を踏まえつつ、大英帝国インド軍の将校となったアルジャンに主な焦点を当て、彼が、英領インド軍の将校としての自分に誇りを持っていたにもかかわらず、どのような過程や葛藤を経ながら、自己否定に至り、インド国民軍に参加し、悲劇的な死を遂げるのか、というテーマに主眼をおいて分析して行きたい。これは、インド国内における、ガンディーやネルーの指導するインド国民会議による非暴力抵抗運動によるインドの独立の達成という物語に対する、独立へのもう一つの道の物語である。

そして必要に応じ、インド独立連盟と日本政府や軍との関係にも触れて行きたい。

Ⅲ ウマのアメリカでのインド独立連盟との出会いと、日本、マラヤ、ビルマを経てのインドへの帰還の物語

イギリスのインド人社会と独立運動

ウマは、ロンドンへ向かう船上、古くから交友のあったダット婦人とその夫に出会う。ロンドンに住むインド人を皆知っていたダット婦人は、ウマにパーシ教徒のカーマ (Cama) 婦人を紹介する。カーマ婦人は、ボンベイ出身であったが、最初見たときにヨーロッパ人だと思うほどにヨーロッパ的で、インドの真実をどのインド人よりも率直に語る人で、自分が属するサークルにウマを紹介してくれたのだ。それはウマと同じような考え方をしている理想主義的な男女の集まりであり、この人々との交友を通じウマは、インドの独立の為の闘いに海外からでも貢献できることを知ったのである。

だがそれはイギリスではなかった。イギリスにいとウマは、「町全体が、亡くなった夫のことを思い出させようと企んでいるような気持ちになったのだ」。つまり、イギリス人に対し、夫に卑屈な態度を取らせた国の雰囲気をややおうなしに感じたのであろう。そこでウマは、カーマ婦人の勧めで、アメリカのニューヨークに渡り、インド人の独立の大義に同情的な、アイルランド人の友人を紹介してもらう。アイルランドは、インドと同様に、イギリスの植民地であったが、この頃、独立運動の最中にあつたのである。(TGP, pp.203-204)

ウマのインドへの帰郷とドリーとのマラヤでの再会

ウマがアメリカに渡った後、ウマとドリーとの間の手紙のやり取りは途絶える。ウマはニューヨークで出版社の校正係をしつつ、インド独立連盟の活動に忙殺されるが、ドリーは二人の息子の子育てにエネルギーの全てを奪われ、社会から孤立した生活を送っていたのである。しかし、1929年、ウマから久方の手紙が届き、20数年をインド独立連盟の活動に捧げ、50歳になり、余生をカルカッタの実家で過ごすべく帰ってくるという。そして連盟の仕事の関係で東京、上海、シンガポールのインド独立連盟の事務所に立ち寄る為、太平洋航路で戻るので、マラヤの

ベナン島で落ち合おうと言う。こうして二人は再会するのだが、ドリーが驚いたことには、ベナン島のマラッカ海峡を望む栈橋には、ウマの帰国を歓迎する沢山のインド人が待ち受けていて、その人々にウマは手慣れた様子で演説をするのである。集まっていたのはインド独立連盟を支持する人々であった。そして一行は、船で対岸のマレー半島に渡り、北の山中のモーニングサイド・ゴム農園を訪問する。そしてその晩、ウマはアメリカでの彼女のその後の人生をドリーに語るのである。

20世紀初頭のニューヨークのインド人

20世紀初頭のニューヨークに住むインド人の数は少なかったが、その関係は緊密であった。あるものは、独立運動に対するイギリスの諜報機関の監視から逃れる為に、この地に避難所を求め、他の者は、教育を受ける機会を求めて来ていた。皆、熱烈に政治にコミットしていて、祖国から離れているという状況のもとで、そうした運動から距離を持つことは困難であった、という。

そしてゴーシュは、この当時ニューヨークに滞在し、後に歴史に名を残すことになるインド人や組織に言及している。筆者の簡単な解説を付け加えつつ紹介してみよう。

アップタウンのコロンビア大学には、当時大学院生として学んでいた若きアムベドカーがいた。アムベドカーは、学校には行けたもののダリット（不可触民）であったため、他の生徒からは隔離され、授業を受けられなかったにもかかわらず、優秀な成績で高校を卒業し、次いで、ボンベイ大学を卒業すると、自分の出身地の市の奨学金を得、アメリカのコロンビア大学やロンドンのグレイズ・イン（ロースクール）やロンドン政治・経済学院（London School of Economics and Political Science）で法律学と経済学の博士号を取得し、インドに帰るとダリットの運動の指導者となり、1947年のインドの独立後初めての法務大臣としてインド憲法草案の起草委員会の議長を務めた人物である¹⁾。

また、コロンビア大学でも政治経済学を講じたタラクナス・ダス（Taraknath Das）は、カナダからアメリカの西海岸にかけての地域、とりわけカリフォルニア大学・バークレー校（UC, Berkeley）で、「自由インド」新聞を創刊し、ガダール党の創設にも参加し、イギリスの諜報機関の絶えざる監視と妨害のなかで、インドの独立の為に活動した人物である。

ミッドタウンにはロフトのようなアパートにラマクリシュナ・ミッションがあり、サフロン色のローブに身を包んだ一人の聖者（sant）がいて数十人のアメリカ人の支持者に囲まれていた。ラマクリシュナ・ミッションとは、ヴィブカナンダン師（Swami Vivekanandan）（1863-1902）によって創立された教団である。ヴィブカナンダン師は、ラマクリシュナ師の弟子であり、ヒンドゥー教のヴェダンタ哲学とヨガを組み合わせ、西洋社会にヒンドゥー教を紹介し、19世紀の末に世界宗教の一つとして認めさせることに成功した人物であり、アメリカで慈善

活動も行ってた。

ダウンタウンのヒューストン通の南側の借家には、ヴェネズエラの建国の指導者ボリバー気取りの変り者の王様 (Raj) もいた。

ゴーシュは、このような多様なインド人の活動が当時のアメリカで存在したことについて、「アメリカは、こうしたインド人や彼等の運動を暖かく迎えたというより、彼等に無関心なだけであったが、ある意味では彼等の避難所となったともいえるのである」、と述べている。(TGP, p. 236)

ニューヨークでウマがインドの未来について考えたこと

こうした雰囲気の中でウマのアパートは、インド関係の人々の集う場所となり、彼等は、新しい世紀を迎えたアメリカの新しい動向を観察し、インドにとっての教訓を引き出だそうとしていたのだ。彼等は、工場や機械化された最新の農場等を訪れ、新しい労働の形が生まれ、新しい運動や考えが必要となっていることを知った。彼等は、進んだ社会では、生き残る上で、読み書きができることが決定的に重要であることを知った。教育が極めて重要となり、全ての近代国家が、教育を義務化していることを知った。彼等の仲間の中で、アジアの東方を旅したものは、日本がその方向に最初に素早く動いたこと、タイもまた王室が率先して教育運動に乗り出したことを知った。(TGP, p. 237)

(ちなみに、タイは、東南アジアでヨーロッパ諸国の植民地となることを免れた、唯一の国であった)。

だが、インドでは、軍事予算に国の財政の6割が費やされていた。「インドは巨大な駐屯地と化していて、その征服軍の維持や、東方戦役の資金を支えているのは、貧窮したインドの百姓である」とウマの同時代のインド人は述べていた。世界の他の国々も、現在のアメリカのようになったとき、インドの人々はどうなるのだろうか？大英帝国が崩壊し、支配者が去っても、何も変わらない。インドの進むべき軌道は変更不可能な道に固定され、将来における破綻に向けて情け容赦なく向かって行くのである。そのように考えた人々のなかには取り乱すものや、気がおかしくなるもの、ただ諦めてしまうものもあった。共産主義者になるもの、宗教に心の安らぎを求めるものもいた。(TGP, p. 237)

アメリカ西海岸におけるガダール党の発足からインド独立連盟へ

ニューヨークのウマの友人たちのなかには、カリフォルニア大学・バークレー校 (UC, Berkeley) のインド人学生が発行するニューズレターから指針を得るものも沢山いた。このニューズレターは、インドの言葉で1857年のセポイの反乱を意味するガダール (*Ghadar*) と呼ばれ、この雑誌の発刊に関わった人々は、ガダール党と呼ばれていた。これを支持したの

は19世紀末から20世紀初頭にかけて西海岸に定住した人々であった。こうした移民の多くはシーク教徒であり、元英領インド軍兵士であった。彼等は、カナダやアメリカに住み、海外でのインド人への酷い扱いが、イギリスの植民地であることの結果であると感じ、自分たちがかつて忠誠をつくした帝国の敵となったのだ。彼等のうちのあるものは、現役の兵士である自分たちの友人や親類のものを転向させようとし、他のものは海外に味方を求め、アメリカで抵抗を続けるアイルランド人との関係を深めようとした。インド人は反乱の技術についてまだ長けていなかったのだから、先輩のアイルランド人から組織化の方法、本国に送る為に武器を買いあさる方法、帝国の現役の兵士の間で反乱を醸成する技術について教えを乞うたのだ。ニューヨークの聖パトリックの日には、少数のインド人のグループが自分たちの旗をかざし、インドの様々な衣服に身を包み、アイルランド人に混じって行進することがあった。(TGP, p. 238)

第一次大戦の勃発にともない、イギリスの諜報活動による圧力の為に、「ガダール党」は地下に潜伏することになり、そこから沢山のグループが生まれた。インド独立連盟はそのなかで最も重要なものであり、何千という海外に住むインド人が参加していた。ウマがインドへの帰還に際し東京、上海、シンガポールに立ち寄ったのは、そこにある連盟の支部に立ち寄る為であった。(TGP, p. 240)

日本の大アジア主義者とガダール党員

ゴーシュは、このようにさりげない形で、1929年の日本にインド独立連盟の支部があったことに触れているが、当時の日本の政治はインドの独立運動とどのように関わっていたのか？バスキは、その間の事情について以下のように述べている。

アメリカでウマが出会ったガダール党を形成していたのは、元々、インドのパンジャブ地方でイギリス軍に反乱を起こす企てをしていた元兵士のシーク教徒であった。彼等は、イギリスの諜報部による弾圧の結果インドに居られなくなり、1912年にアメリカの西海岸に渡り、インド人移民の間に安全な活動の場を見出し、サンフランシスコで「ガダール」という新聞を出したのだ。第一次世界大戦が始まった1914年にガダール党員たちは、数千人のシーク教徒をインドに帰し、イギリスへの反乱を企てた。英領インド諜報部（IB）は、それを事前に把握し、計画を失敗させた。

その後、ガダール党の指導部は、イギリスと戦っているドイツのベルリンに移り、上海、バタビア、アメリカ等のドイツ大使館を利用し、インドで活動する党員に指示を与えた。ドイツは、インドで反乱を起こさせ、イギリス軍や英領インド軍が、大戦中に彼等との闘いに動員されるのを妨害しようとしたのだ。しかし、それも英領インド諜報部隊にその動向を事前に知られ失敗に帰した。(Bakshi, p. 80)

日本は、そのようにして、インドに居られなくなったガダール党員に避難所を提供していた

のだ。ウマが、1929年、太平洋航路でインドに帰国する途中訪れた東京のインド独立連盟の事務所に居たのは、ラーシ・ビハリー・ボーズ (Rash Behari Bose) であった、と思われる。

ラーシ・ビハリー・ボーズ (1886-1945年) は、オーロピンド・ゴシュのヒンドゥー哲学の影響を受け、ヒンドゥー・ナショナリストになり、インド独立運動に参加し、1912年に、インド総督のハーディングの暗殺や、「ラホール蜂起」を試みるが、イギリス諜報部によって阻止され、追われる身となり、上海のドイツ大使館に逃亡し、第一次世界大戦中の1915年に、インドで革命を起こす為の二つの計画に関わった。しかし、これも、「ガダール党」に浸透していたイギリス諜報部の為、動きを事前に知られ失敗し、1916年に日本に逃亡し、汎 (大) アジア主義を掲げた日本の極右組織玄洋社・黒龍会の頭目、頭山満の庇護を頼った²⁾。

頭山満とラーシ・ビハリー・ボーズ

頭山は、ボーズをインドに帰そうとする日本政府の圧力をはねつけるほどの力を持っていて、ボーズを匿い、やがてボーズは、頭山が媒酌人となる形で相馬家の娘と結婚し、日本に帰化した。そしてボーズは、インド独立同盟の日本支部を設立した。そして、日本軍のマレー侵攻が行われた1941年にもこの事務所は、活動しており、ラーシ・ビハリー・ボーズは、第一次インド国民軍の結成を助け、第二次インド国民軍の結成の基礎を作ったと言われている。(Bakshi, pp. 80-81)

では、ラーシ・ビハリー・ボーズを受け入れ庇護した頭山という人物は、どのような思想を持っていて、どういう点でラーシ・ビハリー・ボーズと頭山は、同調したのか？頭山は、1855年、福岡の士族の家に生まれ、幕末期の薩長の尊王攘夷運動に共感し、明治維新後も、尊王攘夷思想の立場から、近代化・西洋化の流れに傾く政府や社会の動向を批判し、「アジアをアジア人のもとへ」というスローガンの下、天皇を頂点とする日本古来の伝統にたった日本独自の政治体制を、東アジアや東南アジアにも広げようとする拡張主義に立ち、西洋の植民地・反植民地支配の下にあるアジア諸国の独立運動を支持していたのである³⁾。つまり、イギリスに代表される西洋への嫌悪と、自国の伝統的立場を重んじる傾向において、ラーシ・ビハリー・ボーズと頭山との間には通じ合う所があったのであろう。

だが、すべてのインド人がそうであったわけではない。東洋で初めてノーベル文学賞を受賞したベンガルの詩人タゴールは、生涯に何度か日本を訪れているが、彼が頭山と初めて会ったのは1924年のことであった。

タゴールと頭山満

ミーシャによれば、タゴールは、黒龍会の超国家主義的指導者で日本のアジア大陸への進出に身を捧げている頭山に会い、アジアが精神復興の先駆けとならねばならないという自らの主

張を繰り返した。

最初、タゴールは、大アジア主義を唱える日本人（頭山）が、その言葉より遙かに攻撃的なことを考えているとは夢にも思わなかった。1929年にカナダに行く途中で、日本に立ち寄り、日本の国内を旅行し、「アジアの希望」について再び語った時、タゴールは、日本が「西洋モデルを模倣しており、西洋文明の泥沼に自分を見失っている」と警告した。

同年の暮れに日本を再び訪れた時、タゴールは、日本が西洋式の帝国主義国にすっかりなっているのに気が付いた。韓国からの留学生は、タゴールに、自国で日本人が行っている残虐行為について語り、中国人は、1929年段階にはすでに疲弊していた中国を日本が侵略しようとしていると彼に伝えてきた。頭山と会ったタゴールは、怒り狂って頭山を批判し、「あなたは、ヨーロッパ帝国主義のウイルスに冒されている」と言った。頭山はタゴールを落ち着かせようとしたが、タゴールは、「日本には二度と来ない」と言った。そして、その気持ちは、1931年の満州侵略と、1937年の中国への侵略によってより硬化したのであった。（Misha, 2012, p. 239）

大川周明における大アジア主義の理想と現実

だが、アジア主義の理念と、日本の指導のもとに天皇制に基づく政治秩序をアジアに広げようとした結果との間には大きな矛盾があった。有名な大アジア主義者、大川周明は、東京裁判において東条秀樹の頭を叩く等の奇行でも知られているが、その背後には、精神病としての狂気を抱えていたと言われる。そして、狂気が発症していったのは、自らが扇動した大アジア主義の崇高な理念とその現実との激しい矛盾に直面したことによるものである、と考えられる。

たとえば、大川は、南京大虐殺が起きた直後、南京に渡り、そこで「中国人に間違われて日本の将校二人に襲われそうになった」経験があり、「アジアを導くという自身の説が人種の優越感に基づいた暴力を育てていたと知りショックを受けたのかも知れない」。そして、第二次大戦の勃発後、「大川の愛国者的な面は、戦争を礼賛した。・・・大川の哲学者的な面は、日本の軍隊がー1937年の南京で目撃したときと変わらぬ乱暴さと節度のなさでーアジア主義の信条を地域の破壊の口実にしていることを嘆き悲しんでいた。・・・大川は、多くのアジア人が日本によって解放されるというよりも迫害されていると感じているのを知っていたが、それを認めようとはしなかった。・・・戦争が進むにつて、アジアにおける日本の存在はかつての西洋の植民地主義と同様に圧政的なものであるように感じられた。軍の指導者たちは、軍需物資のために各地を荒廃させ、皇民化政策を押し付け、現地の人々を支配し、若い女性たちに「慰安婦」としての人生を歩ませることもあった。汎亜細亜共同体という崇高な理念は、現実には、搾取というおぞましい形を取った。（ヤッフエ、2015年、pp. 194-205）

このような日本の東南アジア諸国への大アジア主義のイデオロギーに基づく侵攻は、西洋諸

国の植民地支配のもとからの独立を目指す民族主義者との間に大きな矛盾を抱えていたのだ。アマタブ・ゴシュが『宮殿』のなかで、日本軍をインド独立連盟の盟友とは考えず、連盟を利用しようとしているだけだと切り捨て、それ以上深く扱おうとしていないのは、そのような現実を知っていたからであろう。

インド独立連盟の立場から見たガンディー

再びテキストに戻ろう。ウマがアメリカでインド独立連盟の理念に賛同し、活動してきた話を聞いたドリーは質問する。ガンディーのことは新聞でよく伝えられているけれども、あなたたちの運動については誰も知らないのは何故？

この問いに、ウマは、次のように答える。ガンディーは、イギリスへの忠誠を基礎にした上での反対運動を率いていて、イギリスのビロードの手に対抗するために選ばれた指導者だが、インド独立連盟は、イギリスの鉄の拳に攻撃を加える組織だからだと言う。

さらに、「ガンディーは、インド兵がイギリスに忠誠を尽くす限り大英帝国は安泰だ、ということを理解できないのだ」、と批判する。英領インド軍は、反乱が世界のどこで起ころうと、いつもそれを鎮圧する。そして帝国は、セポイ（インド兵）を手中に置いておくために手を尽くしている。特定のカーストの者だけが募集され、兵士は政治や、より広い社会から完全に遮断され、彼等は土地を与えられ、その子供たちに仕事が保証される。

ドリーは、ではあなたたちはどうしようというの、と聞く。ウマは、兵隊の目を覚ますのよ、と答える。これはそんなに難しいことじゃない。連盟の指導者たちは、もともと兵隊だったのよ、と言う。(TGP, p. 239)

この時点でのウマは、強大な軍事力によって植民地支配を維持してきたイギリスに対するガンディーの非暴力・抵抗運動の無力さ、無害さを強調し、だからこそガンディーの運動が注目を浴びていると主張し、目覚めた元兵士を中心とする勢力による武装蜂起を、それに対置しているのである。

さらにウマは、元兵士のシーク教徒たちが、どのようにして反乱に導かれて行ったのかを語る。

退役インド軍兵士とインド独立連盟

ウマは、ジョージタウンの桟橋で彼女を出迎えたシーク教徒の指導者アムリーク・シン師 (Amreek Singh) の物語をする。ウマは、シンとカリフォルニアで昔出会っていた。彼は元兵士であり、英領インド軍の伍長 (Junior NCO) にまでなったが、軍を脱走したのだ。「自分たちが、自分たちと同じような立場にある人々を征服する為に使われている、と理解するまでどうしてそんなに長くかかったの?」、とウマが聞くと、俺たちは、征服する人々を自由に

するのだと教えられたのだ。悪い王様や、そのもとでの悪い習慣からね。俺たちが信じたのは、そういう連中自身が、それを信じていたからだ。彼等からすれば、彼等が支配する所全てに自由が生まれるというわけだ。

ミーシャは、この点について次のように述べている。

国内において議会制民主主義を掲げつつ、帝国主義的植民地主義政策を取っていた当時のイギリスにおいては、「いかなるものであれ、独裁制というものは人類への侮辱であるというという考えが、本能的な感情になっていたので、・・・帝国主義は、そのような感情に合わせ、自らの行為を合理化する必要がある。その為に、自らが、自由の守り手であり、非文明的な人々を文明化し、訓練の行き届いていない人々に訓練をほどこし、時が来れば、慈悲深い征服者は、仕事を終え、利己心を持たず、退くのだ、と言う振りをすることによってのみ可能となったのだ。イングランドがムガル王朝の遺産を篡奪し、高潔さと寛容さの輝かしさによって、我々の目をくらませ、黙って服従させたのは、そのような公言によってなのだ」。(Misha, p. 223)

モーニングサイド・ゴム農園のインド人労働者

だが、実際の労働現場においてウマが見たのは、過酷な規律の下で労働を強制されるインド人労働者の姿であった。そして、それが後に、インド国民軍に参加したインド人労働者が職業軍人以上に粘り強く戦った背景でもあったのである。

ドリーと共に、モーニングサイドを訪問したウマは、ある日、マシューの案内で、ゴム農園で働く数十人のインド人労働者が、農園の事務所の前の広場で夜明け前に集まり、点呼を受け、請負業者からその日の仕事を割り当てられる場面を見ることになる。

その労働者は、南インドのタミールからやってきた人々である。ヨーロッパ人とアジア人の混血の太ったトリンプル氏が総監督で、ユニオン・ジャックの旗を掲げ、その背後に二列に並んだインド人の監督官とともにそれに敬礼する。インド人労働者は、男女からなり、何列にもなり整列し、監督官が、それぞれの列に向かって名前を呼びあげる。それを見つめるトリンプル氏の様子は学校の校長のようでもあり、軍隊の軍曹のようでもあった。トリンプル氏は、時折、癩癩を起し、鞭を小脇に特定の労働者に駆け寄り、口汚い言葉を投げかけ叱りつける。ウマは、それを見て、マシューに、アメリカの今は存在していない南部の奴隷制の時代、アンクルトムの小屋の世界を思いおこさせる、と言う。(TGP, p.247)

マシューは、その後、ウマをゴムの木が生えている場所に連れてゆく。ゴムの木は皆同じ大きさである。これはクローン化技術のお陰である。しかしそれに反逆する木がある。ゴムの木は、インド人労働者の命の代価として買われたものだが、木のなかには、言われた通りにしないものもある。闘っているのだ、という。

マシューは、どんなにこの帝国をうまく運営しても反抗するものがある、と言う。育てている木のあるものは、本能で反抗しているというの？とウマは笑いがらう。もしインド人の労働者が、木から学んで反抗しようとしたらどうするの？マシューは、そうならないで欲しいものだ、と笑う。(TGP, pp. 249-250)

ビルマにおける民族主義の高まりとインド人排斥の動き

モーニングサイド・ゴム園訪問の後、ウマはラングーンに立ち寄るが、船中でのドリーの話によれば、ビルマの情勢は大きく変わり、今は恐怖を感じるという。ビルマ人の間で怒り、恨みの感情が高まり、しかもそれがインド人に向けられている、というのだ。その理由は、インドの高利貸がビルマの農地のすべてを手中にし、商店を経営し、地元の人々は、金持ちのインド人が威張り散らし、植民地主義者のようだと怒っている、と言う。そうしたなかでインド人の血の混じったデイスは、町で口汚くののしられた、と言う。そして先日、ラングーンで、ドリー自身の車を人々が取り囲み、車中の彼女に拳を振り上げ、怒の感情を露にしたのだ。「どうしてこんなことをするの？」と抗議すると、彼等は返事をする代わりに歌で答えたという。それは政治的な歌で、「ビルマ人が外国人と結婚するのは間違っている。私のように、外国人と結婚した女は、ビルマ人への裏切り者だ」という意味だという。排外主義的な政治運動が広まっていたのだ。(TGP, pp. 257-258)

ビルマ人とインド人を対立させる帝国のビルマ植民地政策

その後ウマは、ビルマの各地をイド独立連盟のメンバーをたずねて旅行する。そして至るところで、インド人とビルマ人の間の歪が大きくなっていることを知り、心を痛める。ビルマは、英領インド政府の支配地域に組み込まれていたのだが、そこからビルマ政府を切り離せという運動が、学生や民族主義者の間で広まっているのだ。

ウマは、ビルマに住む少数派のインド人が感じる恐怖には共感したが、インド人たちが、自分たちの安全は帝国によって保証されている、と考えていることには賛成できなかった。というのは、彼等の安全への脅威の根源は、ビルマ人とインド人を対立させることによって自分たちの存在が必要であると納得させようとする、帝国の植民地政策にある、と考えていたからだ。(TGP, p. 260)

ラングーンでのインド人への暴動を目撃するウマとドリー

ウマとドリーは、王女が亡くなった家を見に行った帰り、スーレー・パゴダ (Sule Pagoda) の近くの通りが閑散としていることに驚く。やがて通りの奥で沢山の男たちが列を成し、順番を待っているのが見える。彼等は入れ墨のような模様を胸に塗ってもらっているのだ。それを

見たとたん、ドリーは「家に帰りましょう」という。その印は出陣する兵士の印だったからだ。

そして次の瞬間、ウマとドリーは、車の前方に、必死に逃げるインド人の人力車引きの男と、その後を追うビルマ人の男を見る。追いかける男は武器を投げ、逃げる男の首を切り落とし、首を失った男の体がもう一歩前に動き、そして地面に倒れる姿を目撃したのだ。ドリーは、とっさにウマを車の床に隠した。ウマは床に身を伏せたが、目をつぶると体から切り離された男の顔が浮かび、床に思わず吐いてしまう。ドリーが男たちの尋問を受けている間、ウマは吐しゃ物に耐えながら、じっとしていたのだった。

インド人への暴動は、数日続き、何百人ものインド人が迫害を受けた。インド人を暴徒から守り、自宅に匿ってくれた多くのビルマ人が居なかったとすれば、この数はもっと大きくなっていたかもしれなかった。暴動のきっかけは波止場で働くインド人労働者とビルマ人労働者の間の衝突であった。インド人や中国人の所有する事業所が襲われ、そのなかにはラージュクマールの材木置き場の一つも含まれていた。だがラージュクマールは、ビルマで彼の人生をかけて築き上げたものを放棄することを断固拒否した。ウマは、倒れそうなドリーを気遣ってラングーンに残った。(TGP, pp. 262-263)

ビルマにおけるサヤ・サン (Saya San) の人民蜂起 (1930-1932) の勃発

何週間か過ぎるうち、ラングーンの町の不穏な雰囲気はより深まった。もっと奇妙な出来事が起こり始めたのだ。暴動の後、インド人のホームレスが数千人収容されているラングーン精神病院で騒動が持ち上がった。刑務所でも囚人の間で反乱が勃発し鎮圧されたが、そのなかで多くの人の命が失われた。

或る日、見知らぬ人がドリーを呼び止め、「準備せよ。じきに戴冠式が行われる。ビルマを解放する王子様が見つかったのだ」と言った。数日後、ラングーンの近郊で実際、一種の戴冠式が行われた、という話が伝わってきた。サヤ・サンと呼ばれるヒーラーが、伝統的な儀式にのっとり自らをビルマの王だと宣言したという。サヤは、沢山の兵士を集めていて、イギリスによりインドの幽閉されたセボー王の仇討ちをするようにと兵士に命じた、という。

こうしたうわさはウマに、インドのセポイの反乱の前触れとして起こった出来事を想起させた。ウマの予感は当たり、蜂起が森林地帯で起こり、森林局の職員や村長が二人殺害された。次の日、反乱者は鉄道の駅を襲った。インド兵が反乱者を逮捕するために派遣された。しかし、突然、反乱があらゆるところで起きていたのだ。体に呪いの絵を塗りたくり、反逆者は森から現れ、何かに取りつかれたかのように胸をはだけ、銃弾のなかに飛び込んできた。植民地当局は軍を増強し反乱を根こそぎにするために戦った。村々は占領され、何百というビルマ人が殺害され、何千もの人々が負傷した。

ウマにとって、蜂起の勃発とそれを鎮圧した手段は、数か月に渡る悪夢の最高潮であった。

また、インド軍が帝国を守るために使われたのだ。だが、インド人は誰も、隣国で起きていることを知らず、関心もないように思われた。誰かがインドの人々に、このことを知らせる仕事をしなくてはならない、とウマは思った。(TGP, p. 264)

ウマとドリーが目撃したのは、1930年の12月から1932年にかけて、元仏教の僧侶で医師でもあったサヤ・サンに率いられた、この時代の東南アジア最大の人民蜂起であり、現在に至るまでその歴史的、国民的意義が論じられている事件である⁴⁾。

ウマとラージュクマールの決裂

当時オランダのKLM航空が、アムステルダムとこの地域を結ぶサービスを始めており、ラングーンからカルカッタまで、かつて船で4日要した旅が6時間に短縮されていた。ラージュクマールは、暴動のために疲労困憊したウマのためにその切符を買ったのだ。ウマは、カルカッタ向けの飛行便のでるラングーン近郊の空港に、ラージュクマールの車で向かう。

その車中でウマは、涙ながらに「インド人が帝国を守るためにまた使われ、自分たちの友人であるべき人々と戦った」というと、ラージュクマールは「インド兵が守ったのは帝国だけじゃない。もしインド兵がいなかったら俺たちはどうなっていたと思う？」と反論する。それに対し、ウマは、「ラージュクマールのような人間が、インドから労働者をビルマに連れてきてやったことは、ヨーロッパ人がやったことよりはるかにひどいことだ」、と言い、ラージュクマールはそれに反論し、二人は決定的に決裂する。(TGP, p. 266)

ウマをダムダム空港で迎えるウマの親戚

カルカッタのダムダム空港では、ウマの兄とその妻、双子の甥のアルジャンと姪のマンジュ、末の妹のベラが待ち受けていた。この時代は、カルカッタに飛行機が飛来して以来わずか10年しか経っておらず、飛行機に乗ってやってくる人を迎えに行くこと自体大事件だったのだ。双子にとってウマは、未亡人の運命を受け入れる代わりに政治生活に身をささげた炎のような伝説の人であった。

カルカッタに帰るとウマは、兄の住むランカスカ屋敷の自分の部屋に閉じこもり、ビルマで起きた反乱についてインドの人々に知ってもらうべく、新聞や雑誌に記事を送った。ウマは、とりわけインド人兵士が、蜂起の鎮圧に果たした役割を知らせようとした。しかし、インドの世論は、自国の政治に心を取られ、ビルマのことにまで関心を払わなかった。

ビルマの人民蜂起の失敗に学び、ウマはガンディーの非暴力的抵抗運動に接近

或る日、ウマがベンガル語の新聞を開くと、16人の首がテーブルの上に並んで置かれているイラストを見た。関連する記事には、「これはビルマのプローム管区 (Promé District) の

反乱者の首であり、反乱に加わろうと思う者の心に恐怖を呼び起こすために、軍隊のプロームの本部に陳列されている」と書かれていた。

これはまさに中世への逆行以外の何物でもなかった。ウマは、ビルマで体験した数々の場面を想起し始めた。これは、コレクターの死後経験した心の大きな変化に劣らぬ、ウマの心の変化の始まりであった。彼女や「ガダール党」の友人たちが希望をつないでいたのは、まさにそのような民衆の蜂起であった。しかし、今や彼女は伝説や神話に由来する民衆による蜂起は、帝国のような力に勝つことなどできないことを理解したのだ。インドやビルマのように技術的に遅れた人々が、組織化された近代的な軍事力に打ち勝つことなどできないことは明らかであった。たとえ勝利するとしても、それはどちらが勝とうと、想像を超えた流血をもたらすであろう。

かつてウマは、ガンディーの非暴力的抵抗運動の思想は、主観的願望の哲学だと考えていたのだ。だが今や、ガンディーは、何十年も先を行っていた、と考えた。彼女が、ニューヨークで育てていた反乱というロマンティックな思想こそが、夢想に過ぎなかったのだ。ウマは、彼女が何度も読み、その度に無視してきた言葉を思い出した。それは、植民地主義に対抗する運動は、武器を持たないインド人の武器を持った人々—それはインド人とイギリス人の両方を含むのだが—に対する蜂起であり、彼等が選んだ武器とは武器を持たない人々であり、その弱さこそがその力の源なのである、というガンディーの言葉であった。

一度心を決めるとウマは、素早くそれを行動に移した。彼女は、ガンディーに手紙を出し、彼女が彼の運動に奉仕する意思を伝えた。ガンディーは、返事としてワルダの修行場に彼女を招いた。(TGP, p. 272)

こうしてウマは、ガンディーの非暴力抵抗運動を支持し、インド国民会議派のメンバーとなる。

IV 英領インド軍将校となったアルジャンの転換の軌跡

大英帝国インド軍将校への道を選ぶアルジャン

時代は推移し、ウマがインドに帰国して以来7年が経過し、1930年代の末を迎えていた。かつて、ダムダム空港にウマを迎えにきたアルジャンとマンジュは、すでに23歳となり、ベラは16歳になっていた。(TGP, P. 274)

ウマの甥のアルジャンは、ある日突然、喜びを露わに、英領インド軍士官学校の合格証を持って帰宅し、家族を驚かせる。それまでアルジャンは、持って生まれた能力を持て余し、その将来が両親の心配の種となっていたのだが、まさかアルジャンが、職業軍人の道を歩もうとしていたとは思いつかなかったのである。何故なら、何世代にも渡り、英領インド軍への入隊は

人種政策に支配され、ベンガル州を始め殆どの州の人間は排除され、カルカッタからその道に進む例はほとんどなかったからだ。そして最近まで、将校への道はインド人には閉ざされていたのだ。だから、5年前デーラー・ドゥーン（Dehra Dun）に士官学校が設立され、その定員の幾つかが一般のインド人受験者にも開かれた事は、殆ど世間には気づかれていなかったのである。

父親はそれを聞いて喜んだ。これで息子の先行きを心配する必要がなくなったと思ったからだ。士官学校を卒業しさえすれば、後は、ところてん式に昇進し、定年後にはたっぷり年金が支給される。一生安泰というわけだ。でも負傷したら、と家族の者が言うと、父親はそんな可能性はあまりないし、これは普通の仕事となら変わらないのだ。それに将校に与えられる社会的地位や名誉はたいしたものだ、と手放して喜んだのだ。（TGP, p.275）

ウマの反応は、さらに驚くべきものだった。ガンディーを訪れて以来、彼女はインド国民会議派に入党し、女性部の仕事をし始めていた。アルジャンは、ウマの反対を予想しているのだが、彼女は、インド軍は盲目的に上官に従うことのない良心をもった人材を必要としている、とガンディーは述べている、と言ったのだ。

このような物語の展開により、ゴージュは、アッシュレー元イギリス首相が、「インドに独立をもたらした決定的な要因」だと指摘した英領インド軍の反乱を、その内部から描いて行くことになる。

「王室大隊」に所属することになるアルジャン

英領インド軍将校への道は、アルジャンが自ら選んだ道であり、彼は、この仕事に誇りをもっていた。だからこそ、アルジャンは、士官学校に入学すると、仲の良い妹のマンジュに、彼の士官学校での日課や生活の様子を子細に手紙で知らせるのである。

アルジャンは、士官学校で親友となったシーク教徒のハーディや、アルジャンの従卒となった同じくシーク教徒のキシャン・シンを通じ、シーク帝国のイギリス軍への敗北（1849年）後、大反乱を経、インドの独立に至るまでイギリス軍に仕えたシーク兵のなかに受け継がれる教訓や伝統について妹に語る。1年後、士官学校を卒業すると、親友のハーディとともに、憧れの、第一ジャット軽歩兵大隊（1st Jat Light Infantry）に所属することになる。

彼が属した大隊を未だに「王室大隊」（Royal Battalion）と呼ぶものがいた。それはムガル帝国を倒した東インド会社が、引き続きインド全域の植民地化を目指し、インド中部に勢力を持っていたマラタ王国との三次に渡る戦争を行うのだが、第一ジャット軽歩兵大隊のその時の戦いぶりを称賛してレイク卿（Lord Lake）がそう呼んだからだという。

また、アルジャンは、この大隊が第一次大戦のときのドイツ軍とのゾム（Somme）での戦いや、メソポタミアでのアラブの反乱の鎮圧、そして清朝の末期の民族主義的な義和団の乱の

鎮圧等で数々の勲章を得た歴史を誇らしげにマンジュに語り、自分がその連隊に加わることができたのだと語る。そして自分とハーディは、この連隊で将校となる最初のインド人であると報告する。(TGP, p.280)

つまり、アルジャンには、自分が、イギリスに植民地支配されているインド人であり、かつ、世界に広がったイギリスの植民地体制を軍事的に支え、反乱を鎮圧する為に利用されている、という意識が無いばかりか、自分がイギリス帝国軍の一部であることを誇りと感じているのだ。

バックランド中佐と従卒のキシャン・シン

そしてアルジャンは、士官学校での教官であり、彼の上官となったイギリス人のバックランド中佐を尊敬し、彼の話を延々と妹に語る。そして彼の身の世話をすることになった従卒のキシャン・シンが、ある日、ウマがくれたオー・ヘンリーの物語を読めないながらに眺めているのを発見し、内容をインドの言葉になおして教えてやり、どう思うかと聞くと、シンは、「悲しい物語です」と言い、その目には涙がたまっていた話をする。そしてイギリス人がインド兵を、「無垢な心をもった善良な人間だ」と評した言葉を妹に紹介する。つまり、アルジャンは、自分をイギリス人士官と同じ立場に置いているのである。(TGP, p. 281)

カルカッタでのマンジュの結婚式で帰ってくるアルジャン

軍隊での経験を語る兄の手紙を読みながら、マンジュはこのまま結婚するしかない自分の人生を見つめ、思い切って女優のオーディションを受けるのだが、そこで偶然、監督の友人として紹介されたラージュクマールとドリーの長男ニールと出会い、結婚し、カルカッタで結婚式を挙げることになる。そしてこの結婚式に二つの家族が集合し、アルジャンも久しぶりに兵営から実家に戻ってくる。(TGP, p. 282)

インド人将校の世界

ゴーシュは、カルカッタの実家での食事の場面で、芸術写真家として身を立ようとしている、ニールの弟ディヌの視点から、英領インド軍の士官候補生として、軍隊生活のなかで変化しつつあるアルジャンの姿を描いて行く。

第一に、指揮官に必要な仕事を学ぶことにやりがいを見出すアルジャンである。いち早く地形の特徴を把握し、味方の損害を軽減できる兵の配置を判断する訓練や、ある目的の為に指揮下の兵を動かす手順の習得等について生々と話すアルジャンを見て、軍隊といえば体を動かすというイメージしかもっていなかったディヌは、新鮮な驚きを感じる。

第二に、軍隊生活の集団性に基づく、士官相互の仲間意識である。カルカッタのウイリアムズ砦には士官学校時代の友人が沢山いて、アルジャンが連絡を取ると仲間がどっと家にやって

くるのである。

ディヌのそれまでの軍隊への態度は、完全な敵意と興味混じりの無関心との間を揺れていたが、彼等を見ていて自分との違いを強く感じる。とりわけ強く感じたのは、軍隊のなかで生み出される仲間意識と、芸術家として一人で仕事することに喜びを見出す自分との違いであった。(TGP, p.297)

インド人将校は最初の近代的インド人か？

第三に、ディヌが特に注目したのは、アルジャンが自分たちインド人士官を、「本当の意味で最初の近代的なインド人」だと特徴づけた点であった。アルジャンは、「俺たちを見てみろ。パンジャブ人、マラタ人、ベンガル人、シーク教徒、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒だ。インドのどこで俺たちのような集団にでくわすだろうか？軍隊のなかでは、地域や宗教は関係ない。ここでは皆一緒に飲み、牛肉や豚肉を平気で食べるのだ」と言う。

アルジャンは、将校同志の食事は毎回冒険であり、栄光あるタブーの侵犯行為なのだという。皆、初めて豚肉か牛肉を一切れ一口にしたとき、胃がむかつき吐きそうになるのだが、嫌悪の感情をこらえつつ、我慢して飲み下したのだ。これは小さいが必須の闘いで、彼等が大人であることの証明であるのみならず、将校としての適格性のテストなのだ。インド人将校は、上司であるイギリス人将校のみならず、自分たちも、支配者、エリートのメンバーに加わることができることを証明しなくてはならなかったのだ。大地との絆を乗り越え、育ちによって体のなかに組み込まれた反応を克服できるほどのビジョンを持っていると証明しなくてはならなかったのだ。

しかし、ディヌにとって、これは非常に腹立たしい言葉であった。ディヌは、人間の近代性の基準は、何を食べるかではなく、その人がどういうものの見方をするのかにある、と主張する。当時の写真界の新しい潮流を代表していたスティグリッツ等の写真こそが彼にとってモダニティを表していた。

しかしアルジャンは、彼等のいう近代は本で読んだもので、俺たちは実際に近代を体現する西洋人と生活を共にし、彼等の考え方を理解している、と主張する。実際、多くのインド人が、支配者のイギリス人と会い、話すことなど殆どなかった。イギリスは、インドを支配していたが、実際にはその仕事の多くをインド人自身にやらせていて、自分たちはイギリス人居住区に閉じこもっていたのだ。だから、アルジャンたちのように、イギリス人の将校と行動を共にしていたインド人は、最先端を行っていたのだ。(TGP, pp. 298-299)

このアルジャンとディヌの近代性についてのやり取りは、色々な意味で示唆に富んだ場面である。確かに、アルジャンのいうように、個々のインド人将校が、出身地域、言語、カースト、宗教の違いと、それに伴う食習慣のタブーを乗り越え、インド人として相互に付き合えるとい

うことは近代的国民国家の条件であり、その意味で彼等の集団は近代的だと言えよう。

イギリス的食生活とインド的食生活の二項対立

だがアルジャンの立場を、そのまま受け入れることができないのには、二つの理由がある。第一に、インド的食生活とイギリス的な食生活が二項対立的関係において捉えられていて、イギリス式の食事に慣れることが近代的だ、とされている点である。

これは、現代の多文化主義的なイギリスにおいて、インド料理がイギリスを代表する料理の一つと成っていることから考えてみれば明らかである。このような二項対立は、アジアが西洋諸国への隷属を強いられた植民地時代の思考・習慣に他ならない。

自己矛盾としてのインド人将校一部下から指揮官として受け入れられなかったハーディ

第二に、英領インド軍のなかに新たに導入されたインド人将校という制度は、英領インド軍の伝統的な隷属の本質との自己矛盾であり、軍の内部に混乱を引き起こし、その崩壊の種を含んでいたのである。

次に紹介する、インド人将校が、部下のインド兵から歓迎されるどころか、逆に、拒否されるというエピソードは、一般兵士の間にあった、イギリス人への隷属意識の根深さを示している点で興味深い。

或る日、インド人将校たちを交えた食事の際、「チャパティ好きのハーディがいたらなあ」と誰かが言った冗談で、その場の空気が凍り付く。ディヌが、食後、その理由をアルジャンに問いただす。

ハーディは、シーク教徒であり、伝統的にイギリス軍に兵隊を供給してきたサダールと呼ばれる家系の出身であった。ハーディの家族は皆、第一ジャートの兵隊であり、彼の祖父と父親は、歩兵として入隊し、当時のインド人が昇進できる最も上の地位、すなわち下士官と将校の間のランクにまで上り詰めていた。ハーディは、家族の歴史のなかで、初めて士官として入隊したのである。

だが、将校と兵隊との間には、ハーディが計算に入れていなかった大きな違いがあった。将校以外の兵隊には、それぞれの属する宗教の違いに応じて調理されたインド料理が食堂で提供されるのだが、将校は、イギリス料理が出される将校食堂で食事をするようになっていたのだ。

しかしハーディは、幾ら努力しても、ダル・ロティ（平豆とチャパティとお米からなる典型的なインド料理）を食べないとやっていけない連中の一人だった。そこでハーディは、日に一度は口実を見つけ、町の食堂に通い、腹を一杯にしていたのだ。これはインド人の将校にはよくあることだったが、ハーディはさらに決定的な暗黙の一線を越える行為をした。下の階級の兵士の食堂にしばしば顔を出したのである。そこには小さい頃に「叔父さん」と呼んでいたシー

ク兵もいたし、親戚関係にある隣村出身の者もいた。だから昔と同じような愛情をもって大目に見、このことを黙っていてくれるかと思っていたのだ。だがそれは大間違いであることが判明する。ハーディの父親と同世代のインド兵は、ハーディが大隊に居ることに深く腹を立てていた。イギリス人の将校の指揮下に入ることは、誇りと威信の源泉であったが、インド人の将校の指揮下に入ることは、その特権が薄められることだからだ。

そしてある日、彼等の大隊の指揮官であるバックランド中佐が、ハーディをC中隊の指揮官に推薦した。中隊のインド人下士官たちにとって、これは我慢の限界であった。バックランド中佐の下で長らく務めていた下士官たちは、彼等の代表を通じバックランド中佐に彼等の意思を伝えた。あなたが我々の指揮官に任命したハーディの事だが、我々は彼の父親を知っているし、彼の妹は我々の兄弟に嫁いでいる。彼の実家は我々の隣村にある。どうして貴方は我々がこの若い衆を我々の指揮官として遇することができる考えたのだ？それに、彼は将校が食べるものを食べることさえできないじゃないか。彼は、チャパティを食べるために、こっそりと我々の食堂にやってくるのだ。

これを聞いたバックランド中佐は、深く動揺する。もし、自分たちの仲間しか信用しないという感情のなかに、暗に自己否定の感情が存在するとすれば、自分たちと同類であるというだけで仲間を信用しないという感情の根底には、どれだけの自己否定の感情が存在するのだろうか、と考えたからである。そして、バックランド中佐の説得にも彼等は動じず、譲らなかった。ある種の問題に関しては彼等の願いは受け入れられるべきである、という暗黙の申し合わせが両者の間にはあったのだ。バックランドは、事を荒立てないようにハーディを説得し、彼等の指揮官になることを諦めさせたのである。(TGP, pp. 301-303)

「イギリス人の将校の指揮下に入ることは、誇りと威信の源泉であったが、インド人の将校の指揮下に入ることは、その特権が薄められること」というインド兵の感情は、インド人としてのイギリス人への劣等意識・従属意識がいかに根深いものであったのか、を示している。こうした意識が、イギリスによる支配体制を支えていたのであろう。それは、コレクターが上司のイギリス人官僚を「私の先生」と呼んだのと同根である。

こうしてハーディが深く傷つくことになった、という事情があり、食卓での同僚の心無い冗談にその場が凍り付いたのだと、アルジャンは、ディヌに説明したのだった。

インド人将校アルジャンへの部下の反応

するとディヌは、「インド人将校は皆、同じような経験をするのか？同じインド人から将校として認められるのは難しいのか？」と聞く。アルジャンは、「そうだ、とも言えるし、そうでは無いとも言える」と答え、イギリス人将校の場合よりも、自分がより観察されているのを感じるという。ベンガル出身の将校が他にいないからだろう、とアルジャンは、いう。しかし、

又、彼等は、良かれ悪しかれ、自分をアルジャンの立場に置いて考え、失敗するのを待ち受けるものと、頑張れ、と願う者がいる。俺がインド人兵士の前に立つと、連中は、自分を俺の立場にいると想像する。そして、その時、それまで連中の意識のなかで越えられない溝と思われていたものを超えるのだ。そして、その溝を意識の上で越えたとき、何かが変わるのだ。もう以前のようにはいかない、と言う。

イギリス人将校とインド人将校の対立

「どういう意味だ？」と聞くディヌに、アルジャンは、あるエピソードを語る。

かつて、年配の大佐が将校食堂にやってきたことがあり、古き良き時代の話をしたのだ。食事の後、アルジャンは、偶然、その大佐がバックリー大佐と話しているところを見たのだ。その古参兵は、腹を立て、頬髭を鼻息で揺らしながら自説を説いていた。インド人を将校にするという新しい制度は、軍隊を破壊する、みんながお互いに喧嘩し合うようになり、軍は、崩壊する、と主張したのだ。バックリー大佐は、これを聞いて、公正な態度を貫き、インド兵を将校にする制度を弁護した。だが、アルジャンは、その時自分は、その頑固者の老人の言うことが正しくて、バックリー大佐が間違っていると、内心想ったのだ、と言う。何故なら、元々、英領インド軍は、イギリス人とインド人は分離するという前提で機能し、双方ともその方が良くと思ってきたからだ。だから、インド人の将校が将校食堂で食事をするということになり、今まで通り機能するかどうか疑問だ、とアルジャンはいう。

「どうして？」と聞くディヌに、アルジャンは、言う。何故なら、イギリス人の将校とインド人の将校はいつも対立しているからだ。事は些細なことだ。たとえば、テレビが置いてある部屋で何を見るのかを巡り、イギリス人将校が見たいものと、インド人将校が見たいものが対立し、チャンネルの奪い合いが絶えず起きたのだ。

「子供の喧嘩みたいだな」というディヌに、それはそうだが、重要なことが背景にあるのだ、とアルジャンは言う。

イギリス人将校とインド人将校の給料の違い

俺たちは、皆、同じ仕事をし、同じ食事を食べるのだが、本国で訓練を受けたイギリス人将校の給料は、インド人将校よりもかなり高いのだ。

俺とは違って、イギリス軍が、自由と平等のために闘う軍隊だと、真剣に信じている連中にとって、これは大事なことだ。俺は、そんな言葉を聞くと、多少差し引いて聞くのだが、連中はそうじゃない。真面目に文字通りに受け取り、それが馬の前につりさげられたニンジンのようなものだとは、彼等にとってはショックなのだ。だが、現実には真実はいつも曖昧にされ、大ごとになることはない、とアルジャンは言う。(TGP, pp. 303-304)

このインド人士官制度についてのエピソードは、幾つかの点で重要な意味を持っている。第一に、英領インド軍を伝統的に支えてきたものが、インド兵のなかにあるイギリス人への劣等・隷属意識であった事が明るみにでている、という点である。第二に、インド人士官制度は、その支えを打ち壊す契機を秘めている点である。つまり、インド人士官を目の前にすることにより、それぞれの兵士が、士官の立場にある自分を想像することにより、それまであった劣等・隷属意識を乗り越え得る、という点である。

第三に、インド人将校とイギリス人将校への給料上の扱いの違いは、イギリス軍が公言している対等・平等の原則と矛盾し、軍務を単なる仕事と考えていたアルジャンとは違い、イギリス軍の言うことを真面目に信じ、軍務に単なる仕事以上の意味を見出してきたインド兵にとっては大問題であった、という点である。

この軍隊内部における建前と現実の間の乖離や矛盾が、海外に派遣されるに及び、露骨に露呈し、自由や平等がインド兵を利用する為のニンジンであることが判明すると、イギリス軍への忠誠心が揺らぐことになって行くのである。又、ここには、軍務を単なる仕事だと見なすアルジャンの場合と軍務にそれ以上の意味を見出すハーディの場合における、インド軍の役割についての「気づき」の過程の違いの要因の一つも示されているのである。

大規模な国民会議による反戦デモを巡って

ゴーシュが次に描くのは、カルカッタで行われた大規模なインド国民会議派による反戦デモである。ガンディーは、迫りくるヨーロッパにおけるドイツのファシズムとの戦争において、イギリスがインドの独立を保証しない限り戦争に協力しない、という立場を取り、「どうして我々は二つの悪のどちらかを支援しなくてはいけないのか？」と問いかけていたのである。そして、それを支持するインド人による大規模なデモが、インド国民会議派の下で行われたのである。

マンジュの結婚式の準備で買い物に出ていたウマ、アルジャン、そしてディヌは、買い物から帰る途中でデモ隊の列と遭遇し、おまけに車のエンジンが動かなくなり、長い反戦デモを見ることになる。そしてデモ隊の一人がアルジャンにパンフレットを手渡す。

アルジャンは、「どうしてインドは、自由という名の下に、この悪魔のような帝国を守らなくてはいけないのか？」と言うガンディーの言葉を引用したピラを見て、反感を露わにする。ウマは「言葉に気をつけなさい。私も本当はあのデモに参加することになっていたのよ。で、あなたはどう思っているの？」とアルジャンの意見を求めるが、アルジャンは、肩をすくめる。その時、思いがけなくディヌが割って入り、自説を展開する。

ディヌは「アルジャンの言うことは正しい。この連中は馬鹿だ」と言いウマを驚かせる。ディヌは、「僕が考えているのは、ファシズムのことだ。今一番大切なことは、ファシズムと闘う

ことだ。・・・ヒットラーとムッソリーニは史上類のない独裁的で破壊的な指導者だ。・・・もし彼等が、自分たちの意思を世界に押し付けるようにでもなれば、僕たちは皆終わりだ。彼等のイデオロギーは、特定の人種の優越性と他の劣等性を論じている。ユダヤ人を見て見ろ。そして、もし奴らが勝利すれば世界中の労働運動が破壊されるだろう。・・・それにイギリスが敗北したらインドとビルマの状況が良くなると思っはいけない。彼等の思惑は、イギリスに代わり、世界を支配することだ。それにアジアはどうなるだろう。・・・日本はナチやファシストと同じような帝国になろうという野心を抱いている。去年、南京で日本軍は何十万人もの罪の無い人々を殺害した。サヤ・ジョーンズによると、彼の奥さんの親戚も殺されたそうだ。・・・もし奴らがインドに辿りついたら、同じことをしないと云えるかい？ そう思っていたら大バカ者だ。奴らは、最悪の帝国主義者で人種差別主義者だ。もしそれが成功すれば史上最悪の悲劇だ」、と主張する。

つまり、ディヌは、ドイツのファシズムと日本の帝国主義の二つを、イギリスに勝る悪であり、敵だと規定しているのだ。

それを聞いてウマは、冷静に反論する。インド国民会議派のなかで、ナチやファシズムに共感を持っている人など誰もいない。やつらは、あなたの言う通りの連中よ。私たちは、二つの悪の間に挟まれている。そして私たちが直面している問題は、どうして二つのうちのどちらかを選ばないといけないのか、ということよ。ナチがやっていることと、イギリスがやってきたことと、どう違うというの、と問いかける。もっと悪いことには、大英帝国は、一国の成功のモデルになってしまった。ベルギーをご覧。ベルギーは、コンゴに駆けつけて制圧し、1千万以上の人を殺害した。何のため？ イギリスのような帝国を作る為じゃない？ ドイツや日本が望んでいるのも自分たちの帝国を作ることじゃない？

デモ隊が通り過ぎ、アルジャンが、車をランカスカ屋敷に向けても、ディヌにはまだ言い足りないことがあった。貴方はいつも、帝国の悪やイギリスがインドにしてきたことを言うけれども、イギリスがインドにやって来る以前には、酷いことがインドには無かったと思っているのですか？ 今も続く女性への酷い扱い、カースト制度、不可触民制度、未亡人の火葬等、と問いかける。

ウマは、鋭く反論する。私は、インド社会の恐ろしいところは重々承知しているわ。女ですもの、あなた以上にね。「独立のための闘いは、インドの改革と一体である」とガンディーは常々言っているのよ。でもね、帝国が改革に力を尽くすと思っはいけないわ。あなたの国ビルマを考えて見て。ビルマは、もしかすると西洋以上に平等主義的で、女性は高い社会的地位を持っているわ。そして国民は皆読み書きができた。でもビルマも征服され服従させられた。植民地主義者は、自分が支配しようとする国の良いところや悪いところなど考えない。その為に帝国を作ったわけじゃないからよ、という。それを聞いてディヌはかすれた笑い声を上げた。(TGP,

pp. 314-317)

ゴースは、このように第二次世界大戦前夜のインドやビルマにおいて、誰を最大の敵とするのかについて、人々の意見が分かれていた状況を描いているのだ。すなわち、ビルマの左翼の立場に立つディヌは、ドイツのファシズムや日本の帝国主義を最大の敵と見なし、ガンディーのインド国民会議派は、大英帝国とファシズムを二つの悪と見なし、インドの独立が保証されない限り、二つの悪のどちらにも組まない、と言う立場を取ったのだ。

イギリスのドイツへの宣戦布告とビルマでの灯火管制—日本に渡るアウン・サン

イギリスがドイツに宣戦布告をしたのは、マンジュとニールの結婚の式から3ヶ月も経っていない、1939年の9月のことであった。ビルマの一般の人々の戦争への立場はどうであったのか？

ビルマのランゲーンでは、ドイツ空軍の爆撃に備える為、灯火管制も引かれたが、市民には切迫感があまりなかった。インドにおいてと同様に、ビルマにおいても世論は二つに分かれた。多くの名士は、植民地政府であるイギリスを支持したが、独立への保証もなしに、インドやビルマを守るための参戦、という立場には多くの批判も寄せられた。カリスマ的学生活動家のアウン・サン (Aung San) は「イギリスの危機は自由にとってのチャンスである」と言い、突然ビルマから姿を消し、後に日本に渡ったことが分かる⁵⁾。アウン・サンにとっては独立が最大の課題だったのであり、「アジアをアジア人のものに」というスローガンを掲げ、イギリスと対峙する日本に期待を寄せたのである。

それに対し、ディヌとその友人のティーハ・ソー (Thiha Saw) は、学生運動に深くコミットし、左翼陣営の中でも最左翼に位置し、反ファシズムの雑誌を刊行していた。(TGP, pp. 327-327)

ディヌとラージュクマールは、家庭では自分の思想や政治的立場については話さなかった。話し合えば激しく対立することが分かっていたからだ。しかし、ある日、ランゲーンでイギリス軍の下で組織された「空襲警戒計画委員会」の区の会議で二人は鉢合わせし、お互いに驚く。ラージュクマールは、イギリスがいなくなればビルマの経済は崩壊すると考え参加していたが、ディヌは、イギリスへの嫌悪感より、ヨーロッパのファシズムと日本の軍国主義への嫌悪感が勝っていたため参加していたのだ。この予期せぬ遭遇により二人の間には東の間ではあるが心の通い合いが生まれる。(TGP, pp. 329-330)

インド軍内部の不穏な動き

次に、ゴースは、大戦の勃発とともにインド軍内部に起きた不穏な動きを描く。休暇で村に帰っていたハーディが、駐屯地に戻った最初の夜、アルジャンに、軍隊のなかで不穏な動き

が起きているという噂を聞いたと言う。村の近所の殆どの人々は、軍隊のなかに親戚のものが居て、兵隊のなかには海外に派遣されることに抵抗するものがある、と言うのだ。ボンベイでは、シーク兵の部隊が、武器を置き、北アフリカに彼等を連れて行く船に乗ることを拒否した。二名が処刑され、12名がアンダマン島の監獄に入れられたと言う。そのうちの幾人かは、ハーディの村の出身者で、この情報は確かだと言う。驚いたアルジャンは、このことはバックランド中佐に教えるべきだと言うが、ハーディは、当然彼は知っているはずだ。知っていて、これを我々に知らせないのには理由があるのだろう、と言い、二人の間には気まずい空気が流れ、それ以上二人はこの話題には触れなかった。(TGP, pp. 335-336)

それから数か月後、彼等の部隊はデリーの近くの基地に戻される。この頃までにはアルジャンとハーディの士官学校時代の同級生の殆どは、すでに北アフリカ、エルトリア、あるいはマラヤ、香港、シンガポール等に派遣されていたので、二人もそうした地域のどこかに派遣され、先行するインド軍に合流するものと考えていた。戦線の広がりに応じ、彼等の部隊も戦地への派遣に備える新たな任務に追われる。1941年が始まり、自分たちがどこに配属されるのか、という問題が大いに話題となる。(TGP, p.337)

シンガポールに派遣されたインド人部隊反乱の噂—宗派の違いを越えた抗議

23歳の誕生日を迎えたアルジャンは、週末にハーディとデリーに遊びにでかけ、そこで士官学校時代の友人クマールと出会う。クマールは、パンジャブ人の部隊に属し、シンガポールの基地に派遣されていたが、通信訓練の為に一時インドに戻っていたのだ。普段は威勢の良いクマールは、いつになく落ち着いた様子で、シンガポールで起きた奇妙な事件について話始める。インド人兵士が、インド人将校を不可解にも射殺し、その後自殺したというのだ。何人かのインド人将校が、この戦争はイギリス、フランス、ドイツの間の植民地争奪戦であり、インド兵は、この戦争に参加すべきでない、と言ったという噂があったのだ。マレーシアのイギリス軍の半分はインド兵であるため、参謀本部では不安が広がっている。このような騒ぎが広がれば、植民地を守ることができなくなるかも知れないからだ。

現地最高司令部は、慎重な罰を下し、下級将校の一人を罰としてインドに送還することになった。それはイスラム教徒だった。その知らせが彼の大隊に伝わるとイスラム教徒中隊がその将校への同情の印として武器を置いた。そして次の日、大隊の多くのヒンドゥー教徒の兵士もそれに倣ったのだ。

この時点で事態は新たな深刻さを帯びる。何世代にも渡りイギリスは、英領インド軍が、宗派の違いを超えて団結するような事態を避ける為、全ての大隊を、異なったカーストや宗派からなる中隊に編制していて、食堂も、食習慣の違いに従い、別々だった。だから、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が、イスラム教徒の将校を守るために共同歩調を取れるということは、最

高司令部にとってはショックであった。そのようなことが起きたのは1857年の大反乱以来のことだったからだ。

イギリス軍の小隊が、反乱を起こしたこの部隊を取り巻いた。そのイスラム教徒の将校は、実は士官学校以来、彼等も知っている男であり、その大隊は、彼等の大隊の兄弟部隊で、ハイデラバート出身の歩兵連隊の一部であった。

クマールは、さりげない調子で、「海外に派遣されると、部隊は、厄介な影響を被るのだ。将校もね。」と言って肩をすくめた。

ハーディは、「そんなことは、俺たちには起きないかも知れない。それに俺たちの部隊は海外には派遣されないかも知れない。こちらにだって軍隊は必要だからな」、と希望的観測を述べた。だが、アルジャンは、「そんなことをすると、俺たちの軍のなかでのキャリアはどうなる？俺はむしろ一か八か海外に出てみるぞ」と言った。

クマールの話は、信じられないような事態が起きていることを感じさせた。処罰された将校は、もの静かな、中産階級出身で、この仕事を必要としていた。どうしてそのようなことをしたのか、彼等には理解できなかった。もしそれが本当なら、一般の兵士は、最高司令部ではなくインド人将校の命令を聞くようになっている。そのようなことが広がれば、最終的にはインド人将校もいなくなる。イギリス人の司令部とインド人将校が目的を同じくしない限り、そのような事態を防ぐことはできない。もし、イギリス人の利害とインド人の利害の間に分裂があるとすれば、どうなるのだろうか？その結果は誰にもわからなかった。話題は穏やかなものではなかったが、アルジャンは、奇妙な高揚感を感じた。そのような問題に23歳で直面するというのは普通では経験できない責任を負うことであったからだ。(TGP, p. 343)

海外への動員命令—ハーディの中に広がる「誰の為に戦うのか」という疑問

そして1941年2月の半ばに、アルジャンやハーディのところにも動員命令が下る。いよいよ戦うのだ。アルジャンは、この知らせを積極的に受け止めようと振る舞うが、ハーディは違った。彼は士官学校時代の大広間の演壇の上に刻み込まれていた、「君たちの国の安全と名誉と安寧が第一だ」、という銘について、「『君たちの国』というのはどの国のことだ？」とアルジャンに問いかける。「俺たちには国は無いというのが事実だ。それに俺たちが入隊の宣誓をしたとき、国ではなく、帝国の王を守ると誓ったのは何故なのか？帝国を守る為なのか？」と問いかける。アルジャンは、ハーディが、そのような問を発したことに驚くが、ハーディは、「インドが攻められているわけではないのに、どうして海外に送られるのだ？結局、大英帝国の為ではないのか？」と言う。

それに対するアルジャンの言葉は、「ここにも出世できないぞ」という答えにならない答えであった。ハーディは、「お前のその言葉はもう聞き飽きた。そんなことしか考えていな

いのか？」と言う。アルジャンは、キシヤン・シンがその場にいると目配せし、話はここで途絶え、ハーディは、部屋を出て行く。

だが、その一週間前の出来事は、アルジャンにも、将校として部下の命を預かる責任の重さを実感させていた。シンの母親と妻が、海外派遣の時期が迫っているという噂を聞いてシンに会いに来て、「いつ帰って来るのだい？」と心配げに聞いたという。「お前はへと答えた？」というアルジャンに、シンは、「僕の上官は僕が生きて帰ってくるようにしてくれる」と言ったという。それを聞いてアルジャンは、赤面したのである。(TGP, pp.353-354)

海外派遣—乗船時のトラブル

そしていよいよアルジャンたちが海外に派遣される日がやってきた。彼等はボンベイから出航し、一日後、シンガポールに向かうことを知る。

ゴーシュは、すでに海外に派遣されたインド兵のなかで不穏な動きが生じていると述べていたが、アルジャンやハーディが実際にシンガポールに派遣されることによって彼等が体験する事態を通じ、それまで彼等が信じさせられてきた建前と実態の乖離に直面し、インド軍の客観的な姿や役割に直面する過程を描いて行く。

そして、それはすでに乗船時の混乱のなかで起きたイギリス人の兵士とハーディとのトラブルに見ることができる。ハーディは、アルジャンに上官のピアソンをボイコットすべきだという。何故なら、ハーディが口論をしていたイギリス軍の軍曹が、彼を部下の前で「臭いニガー」と呼んだのに対し、ピアソンは何も言わなかったからだ。(TGP, pp. 362-363)

シンガポールのヨーロッパ人のインド人差別

やがてアルジャン達は、シンガポールの基地に到着する。ここは、クマールが話していたインド兵の反乱事件が起きた場所でもあった。インドで聞いたときには信じがたい話であったが、ここに来るとあり得ると思われた。慣れ親しんだ部隊の外に出てみると、隠された意味の迷宮のなかに飲み込まれてしまうかのような感じであった。

例えば、彼等が、クマールに誘われ会員制のプールに行くと、そこには、沢山のアジアに住んでいるヨーロッパ系の人々がいたが、彼等がプールに飛び込むと、皆、プールから上がってしまったのだ。驚かなかったのはクマールだけだった。彼はマラヤに1年以上滞在し、さらにイギリス植民地をあちこち旅していたからだ。

「言うておくべきだったな」とクマールはいう。「マラヤではみなそうだ。アジア系お断りの看板が掲げてあるところもある。シンガポールでは、俺たちも入れてくれるが、ヨーロッパ人は皆、水から上がってしまうだけだ。今はこの規則を少し緩めている。インド兵がこんなに沢山いるからな。しかし、これに慣れておく方がいいな。どこに行ってもいつもこれにぶつかる

のだから。俺たちは、この植民地のために死ぬことになっているのだが、プールは使っちゃいけない、というわけだ」。(TGP, pp. 368-369)

マラヤ人の裕福さとインド人の貧困に初めて気づくアルジャン

彼等の部隊は、やがてマラヤの北部に向かうが、マラヤの田舎は彼等にとって驚異であった。何故なら、そのような繁栄と美しい道路と小奇麗で整った小さな町を見たことがなかったからだ。インドなら金持ち階級しか買うことのできない車、冷蔵庫、エアコン等を普通の人々もっていたのだ。マラヤで極貧生活を送っているのは、インドから送られてきたインド人のプランテーション労働者だけであった。ことさらに自分たちの貧しさに気が付いたのは、マラヤの豊かさを目の当たりにしたからだった。そう思うとアルジャンとハーディは恥ずかしくなるのだった。生まれて初めて、自分たちが置かれた境遇を知ったのである。幼年期以来植え付けられてきた、インド以外の国やその事情への無関心が、このマラヤを旅することによって取り除かれたかのようである。

他の形のショックも待ち構えていた。ユニフォームを脱ぐと、二人はたびたびクーリー（インドや中国から来た非熟練下層労働者）と間違われたのだ。

また市場に買い物に行くと、自分たちが哀れみの眼差しで見つめられるのを感じた。またあるときには、初期のインド人労働者が身に着けていた鎖を意味するクラングと呼ばれたのである。つまり、将校であっても普段着の彼等は貧しいインド人下層労働者と見られたのだ。

インド独立連盟のメンバーから傭兵と呼ばれ、アルジャンにその意味を問う従卒のシン

また、キシャン・シンは、アルジャンに「傭兵」(mercenary)という言葉の意味を尋ねた。実は、シンは移動中、道端のお茶屋で地元のインド人たちと出会い、議論になったという。その集団はインド独立連盟に属していると名乗り、第一ジャットは、本当の兵士ではなく、雇われた人殺し、「傭兵」に過ぎない、と言ったのだ。

アルジャンは、シンがこの問題について答えを求めているのを察知し、説明しようとする。そして現代の兵隊は、ある意味ではすべて雇われ兵だといった。昔は宗教的信念や部族への忠誠から、あるいは自分たちの王を守る為に戦ったが、今では兵士は給料を受け取る一つの職業で、皆、傭兵だ、と答える。だがその後で、アルジャン自身が、では何故「傭兵」という言葉には軽蔑的なニュアンスがつくのかと考え始めた。そして、兵隊になるということは、自分自身に言い聞かせていたように、単に仕事に就くことではないのではと考え始めた。確信なしに人を殺すという行為は、根底的な人間的感情に反するのではないかと思ったのだ。(TGP, pp. 370-371)

雇われ兵の手は別の人間の頭に従う

ある夜、アルジャンは、ブランデーを飲みながらこの問題についてハーディと議論する。ハーディは、「『雇われ兵』の手は別の人間の頭に従う。・・・『雇われ兵』はばか者だ」とポイントを衝く。「ある意味で、皆、あのニューデリーの売春宿の女と同じで、他の誰かの調子に合わせて踊るのだ」。だがアルジャンは、冗談交じりのハーディの調子には合わせなかった。「すると俺たちはみな傭兵なのか？」と聞いた。

傭兵と呼ばれ感情的になるアルジャン

その後、アルジャンは、バックランド中佐にもシンが「傭兵」と言われた話をし、一般の兵士が、他のインド人と接触するのはよくないと言ったのだが、その後、より一層この問題が気になった。自分が「傭兵」だと言われたことで、何故こんな腹を立てたのか、バックランド中佐に分かってもらえなかった、と感じたのだ。バックランド中佐は、アルジャンのように頭の良い男が、ただ事実を述べただけの言葉に、何故腹をたてたのか、わからなかったのだ。アルジャンは、自分が感情的になってしまったことに困惑した。そしてバックランド中佐は、彼が知らないこと、あるいは認めたくないことを知っているような気がしたのだ。アルジャンは、自分が、あたりまえのことに腹を立ててしまった子供のようなのだ、と感じた。(TGP, p. 372)

アルジャンが、「傭兵」と呼ばれることに腹を立てたのは、彼が、イギリス軍の将校と対等の立場にあるインド軍将校としての自分に誇りを持っていたからであろう。だが、現実には、あるいは、周りの人間からは、金で雇われて人殺しをする「傭兵」に過ぎないと言われたとき、それを認めたくなかったからであろう。

昔のシーク兵とインド人将校の違い

奇妙なことに、シンガポールに来てからのそうした経験から、最も大きな影響を受けたのは、アルジャンにもまして、戦士の家系に育った第二、第三世代の将校であった。アルジャンは、ハーディに、「この地域をイギリスの植民地にするのに手を貸したのは、お前の父親やお爺さんじゃないか」と言う。「彼等は我々が見たのと同じものを見たはずだ。彼等はお前に何も言わなかったのか？」ハーディは、「彼等の見方は俺たちと同じじゃない。父親や祖父の世代は、字も読めない世代で、俺たちは教育を受けた最初の世代なのだ」と言う。

アルジャンは、「それでも、彼等にだって目や耳があり、土地の人々と話しただろう」と言う。ハーディは、「あの人たちには関心が無かった。そんなことはどうでもよかったのだ。彼等に現実味があったのは自分の村だけだった」、と言う。

ゴーシュがここで指摘しているのは、今なお多くの開発途上国で紛争や汚職の根源の一つとなっている部族主義である。

カルカッタの都会育ちのアルジャンは、それを聞いて、どうしてそんなことがありうるのかと思うのであった。

その後アルジャンは、数週間の間、この問題について頭を悩ませた。そしてしばしば、自分や同僚たちだけが、途方もない内省の代償を支払うべく選ばれたみたいだと考えた。(TGP, p. 373)

マラヤの基地に燻るイギリス人将校とインド人将校の不和

アルジャンの部隊は、マラヤのスンゲイ・パタニ (Sungei Pattani) 基地に到着する。彼等は、出発前にその基地で数か月前に反乱が辛うじて食い止められたことを簡単に説明されていた。そこではバハワルプール部隊の将校とイギリス人の将校との間に摩擦があったのだ。このイギリス人将校は、インド人将校を軽蔑し、クーリーと呼び、棒で脅かし、酷い場合にはインド人将校を足で蹴ったのだ。これが騒動となり、このイギリス人将校は任を解かれ、インド人将校は国に返されたのだ。

彼等が到着したとき、問題は解決されたと聞かされていた。だが、そうではないことがわかる。イギリス人将校とインド人将校が初めて食事を共にした2時間の間、誰も口をきかなかったのだ。(TGP, p.388)

日本軍のマレー侵攻の開始

イギリス軍は、日本がマラヤ北方の東海岸から攻撃を仕掛けようとしているという情報をつかみ、その先手を取って、シャム (タイ) に深く入り込み、東の海岸を確保するという作戦に変更する。そしてアルジャンの部隊は、マラヤの海岸沿いの南北道路を北上し、日本軍の上陸地点を確保するという重要な役割を担う。作戦実行の前夜、眠れぬアルジャンは、駐屯している駅のラジオのニュースに耳を傾ける。すると、日本軍がマラヤの東海岸のまさに翌朝、彼等が確保しようとしていたシンゴラ海岸に大軍で上陸したというニュースが流れてきたのだ。あわててアルジャンは、寝ていた将校たちにその知らせを伝える。そしてラジオのニュースにさらに耳を傾ける。

1941年12月、日本軍は、真珠湾攻撃と同時に、マラヤの東海岸に、史上例のない規模の陸海空軍共同作戦を繰り広げていたのだ。

翌朝、基地からイギリス空軍機が飛び立ったが、数時間後、それが燃料タンクを空にして基地に戻ってくると、それから数分と経たないうちに、日本空軍の編隊が飛来し、給油中の最も無防備な瞬間に攻撃し、たちまちのうちに炎上させたのだ。

アルジャンは、空港の様子を偵察に行くが、空港の警備にあたったマレー軍は、すでに脱走していた。

他方、モーニングサイドのゴム農園に来ていたディヌは、広場にインド人労働者が集まり、イロンゴが彼等に話しているところに出会い、どうしたのか、と話しかける。イロンゴは、日本が参戦したことを告げ、近所のゴム園のマネジャーたちが、シンガポールに車で逃げ出し、給料を払ってもらいたいインド人労働者が心配してここに集まって来ている、と事情を説明する。その後、二人は、スンゲイ・パタニに車で向かうが、付近の道路は、町から逃げ出す近所の人々であふれている。イロンゴは、逃げ出す人々から、町が、空襲警報もなしに突然空襲を受けたことを知った。

アリスンを探しに行ったディヌとイロンゴは、町でインド人の間で流れる噂を聞きつける。それは日本の爆撃機は、イギリス軍を裏切ったスパイに導かれていたという噂である。

だがそれはインド兵ではなくイギリス兵だったという。逮捕され連行されるのをそのインド人は見ていたのだという。(TGP, pp.411-412)

日本軍との遭遇と戦闘

アルジャンの部隊は、北方のタイとマラヤをつなぐ細くなったところの森の端に移動させられる。ここで日本軍を食い止めるのだ。日本軍は南北ハイウエーを南下しようとしているからである。

すると日本軍の飛行機が飛来し、上空からインド軍にパンフレットをばら撒く。それはインド独立連盟のビラで、「自分たちを隷属させてきた帝国の為に命を捧げ闘うのか?」、と反乱を訴えていた。アルジャンはビラを集めさせ踵で踏みつぶし、このビラを持っていると軍法会議にかけるぞ、といった。

ほどなく日本軍の大砲が火を噴き始め、次第に砲弾が彼等が身を潜めている塹壕の近くに着弾し始め、アルジャンは、15メートルはあるゴムの木が地面から優美に舞い上がり一回転して彼等の方に落ちてくるのを見たのだ。彼等は塹壕の底に身を伏せ、かろうじて難を逃れたのであった。(TGP, p. 417)

開戦後のビルマのインド人を巡る情況

他方、ラングーンでは、日本軍のマラヤ侵攻の知らせをニールが妻のマンジュにもたらす。

その日の午後、ラングーンの著名なインド人弁護士が彼等を訪れ、インド人難民撤退委員会の結成が決定されたと伝える。日本軍がビルマに侵攻した場合に、インド人は二つの面で弱い立場に立つ。一つは、ビルマ人のなかのインド人に敵対的な人々であり、もう一つは、日本人の敵として扱われるという点である。委員会の目的は、できるだけたくさんのインド人を国外に脱出させることである。

ラージュクマールはそれを聞いて驚く。何故なら、彼はこれを絶好のビジネス・チャンスだ

と楽観的に捉えていたからだ。アメリカが参戦し多額の戦費がつぎこまれるなかで、重慶の中国政府の生き残りにとって中国政府への主な物資供給路として、ビルマ南北道の建設は決定的に重要となり、想像を超えたスピードで建設され、彼の買い占めた木材が、彼の言い値で売れることになるかと踏んでいたからだ。(TGP, p. 419)

再びマラヤの戦況—日本軍の全面攻撃の前にイギリス軍の壊走が始まる

アルジャンの部隊は、塹壕から後退せよという命令を受ける。トラックに乗った兵士たちが続々とやってきて、彼等の部隊をトラックに載せたあと、アルジャンは、ハーディとジープで移動するが、その途中で、イギリス軍の二隻の強力な軍艦が日本軍によって沈没させられたことを知らされ驚く。

やがて日本軍からの発砲が中止され、しばしの静寂が訪れるが、やがて南北道の遠くから地響きが聞こえ、絶対、出てこないと言われていた戦車隊が夕焼けの空を背景に姿を現し、大砲の筒を彼等に向け、イギリス軍の車を吹き飛ばすや、アルジャンたちは一斉に逃げ出す。彼等を襲った言いようのない恐怖が、これまで彼等が受けた軍事教練を一挙に無に帰したのだ。振り返ると、戦車が次々と連なってやってくるのが目にはいった。(TGP, pp. 421-424)

イギリス軍の敗走に責任を感じるバックランド中佐

やがてアルジャンは、日没時の暗闇のなかでキシャン・シンに出会う。シンは、大隊の他の10数人の連中と一緒に農園のなかに逃げこみ、混乱のなかでも一緒に行動していたのだ。そして、ハーディや右腕を負傷したバックランド中佐にも出会っていたのだ。

やがて、木の幹を背に座りながら、バックランド中佐は、「がっかりさせてしまったか？」とアルジャンに聞く。中佐が考えていたのは、10歳の頃の思い出だった。彼の父親は、当時はまだ「王室大隊」と呼ばれていたこの部隊の将校を務めていて、母親が、新しく建設された兵営の完成式典で、リボンカットを行ったのだ。ひらめく旗を見ながら、幼いバックランド中佐は、この時、戦史を研究しようと思いついたのだと言う。そして、10歳になる頃までには、この部隊の輝かしい戦勲を全て覚えていたと言う。第一次大戦時のフランスの西部戦線のゾムでの闘いがあったのは、彼が士官学校の最終年度のときであった。そして、それと比べ今日起きたことを人はどう語るだろうか、と言う。(TGP, p. 431)

イギリス軍の一員として認められていないインド兵は、敗走に責任を感じなくてよい、というハーディ

そこへハーディが暗闇のなかから現れ、濾過した近くの池の水を二人にもって来る。

二人だけになったとき、ハーディは、アルジャンに、「バックリー中佐と何を話していたのか」

と聞く。アルジャンは、「敗走は自分の責任だと大佐は言っていた、しかし、自分はそうは思わなかった」と言った。ハーディは、「それは当然のことだ。どうして大佐のように考えることなどできるのか？アスーンを死守したとしても、インド兵が褒められるわけじゃない」。ハーディは、「シンガポールで読んだ新聞各紙が、マラヤ植民地を守るために派遣されたオーストラリア、カナダ、イギリスの若い勇敢な兵隊のことは報道したが、インド兵の存在は忘れられていた。そうじゃないか？」と言う。これにはアルジャンも賛成せざるを得なかった。だから、「アスーンで何が起きたのかは俺たちにとってはどうでもいいことなのだ」とハーディは言う。ハーディは、「時々、これまで自分の祖父や父親がフランス、アフリカ、ビルマで戦った戦争のことを思い起こす」と言う。「だが、インド人がどこそこで戦った、とは誰も言わない。その点は、ここでも同じだ。たとえ勝っても手柄は俺たちのものじゃない。たとえ負けても、同じ理屈で、責任は俺たちにはない」。

アルジャンとハーディの違い

だがアルジャンは、「他の人間はいざ知らず、勝つか、負けるかは俺たちには重要だ」と言う。だがハーディは、「農園のなかに逃げ込んだ時、正直、俺はホッとした。部下の殆ども同じだ。見え透いた芝居がついに終わってしまったのだ」と言う。

「どういう意味だ」と追求するアルジャンに、ハーディは言う。「戦線の一方の側にいて、戦わねばならないと頭では思いつつも、他方、これは自分の戦争じゃなく、勝とうが負けようが、戦功や責任にお前は関係がないと思うのは、奇妙な事だ。俺を必要としない生活様式を守るために全てを掛けていると意識していること、これは知らぬ間に自分に銃口を向けさせられているようなものだ」と言う。だがアルジャンは、「俺はそんな風には感じない」と言った。

ハーディは、言う。「お前はいつも兵役を仕事に過ぎない、というのが、そんなもんじゃない。俺たちは、何故、イギリス軍に居るのか？塹壕のなかにいると、俺たちの仕事にはとても原始的なところがあるのがわかる。兵役は単に仕事じゃない。普段の生活のなかで、俺はこの仕事に命を懸けるなんて人は言うだろうか？人間が命を懸けるのは、自分が何故そうするのかを理解しているときだけだ。だが、塹壕のなかにいると俺の心と体はそれぞれ違う人間のもの見たいなのだ。俺は、誰かに使われる道具みたいなものだ。人間だとは感じられない。どうすれば自分がやりたいことを、やることと結びつけられるのだ？」アルジャンは、「そんな風に考えるのはよくないぞ」と言った。（TGP, pp. 433-434）

ハーディは、シンガポールに来て以来、インド兵がイギリス軍の一部とは考えられていず、単に、イギリスの為に利用されている存在に過ぎないことを知り、もはやイギリス軍への忠誠心を持ってなくなっているのとは対照的に、アルジャンは、未だ、逡巡しているのだ。

バックリー中佐に皮肉を言うハーディ

アルジャンは、バックリー中佐の命令で部下を連れて偵察にでるが、その途中で、とあるゴム農園の支配人のバンガローを発見する。そこに住んでいた人々があわてて去ったらしく、バンガローのなかには食物を始め、日常生活に必要なものがそろっていた。食物があった。風呂もあった。

その家にあった材料を使って将校用の食事の準備がされる。食卓脇の棚にはビールもあり、アルジャンはバックランド中佐に「いいでしょうか？」と聞く。大佐は、「もしクラブで会っていたら、きっと彼等は、勝手にやってくれと言っただろう」と言う。するとそこでハーディは、口を挟み、「でも、俺たち二人は、なかに入れてもらえなかったでしょう」と言った。

やがてハーディは、台所で兵士たちがインド料理を作っている匂いを嗅ぎつけ、席をはずし、チャパティ等を入れた皿を食堂に持ってくる。アルジャンはその匂いに大いに食欲をそそられるが、がまんして目をそらす。ハーディは、「君も食べたらどうだい。チャパティを食べたからと言って野蛮人になるわけじゃない」と言う。アルジャンは、中佐とハーディとの間に挟まれ、いがみ合う両親の前にした子供のように食欲を失い食事に手をつけることができない。(TGP, pp. 443-444)

「チャパティを食べたからと言って野蛮人になるわけじゃない」と言いきるハーディは、インド人を野蛮人と見なすイギリス人への決別宣言であろう。だが、アルジャンは、まだ、イギリスとの自分の繋がりを否定することができないのだ。

食事の後中佐は、ハーディにバンガローへ近づく道を警護している部下の様子をチェックするようにいい、続いて席を立とうとするアルジャンを引き留め、ビールを勧め、タバコを吸い始める。

「インドの独立は近いが、今はイギリスへの忠誠を失ってはならない」と言うバックリー中佐

中佐は、昨夜、インド兵たちがひそひそ声で話していた話題に立ち入り、アルジャンを驚かせる。中佐は、インドの言葉がそれなりに理解できるというのだ。そして彼等がインドの独立を話題にしていたことに触れ、「我々も、インド人大隊の将校のなかで独立を巡る議論が起きていることを知らないわけではないのだ」と言う。そして、「私は、君がどういう意見を持っているのかは知らないが、イギリスの最近の世論の動向に関する限り、インドの独立は、時間の問題だ。帝国の時代が終わったことは、誰だって知っている。野心を持った若いイギリス人がもっとも嫌がるのは僻地へ行くことだ」と言う。

「アメリカ人は、長い間、イギリスのやり方を批判している。政府や軍隊といったやっかいなものを持たずとも、状況を支配できるもっと簡単で効率のいいやり方があるという。イギリス人は皆、これを受け入れことができるようになった。俺のように東洋に長くいる連中もね。

そして現在イギリスがインドに固執している唯一の要因は、一種の義務感だ。信じないかもしれないが、本当だ。追い出されるような形で出て行き、後に混乱を残すようなことをしたくないのだ。そして君も知っているだろう。イギリスが撤退すれば、すぐにインド人同士が宗教の違いや色々な問題でお互いに争い始めることを。私がこんなことを言うのは、今が、現在の日本との戦争のなかで、最もイギリスへの忠誠心を失ってはならない局面だからだ。そして今の局面は一時的だ。アメリカが参戦した以上、我々は勝利する。今この局面において重要なのは、イギリス軍は、イギリスへの忠誠という問題になると長い伝統を持っている点だ。1857年にセポイの反乱が起きたとき、私の祖父は、それに加担した民間人には何の恨みももたなかった。だが反乱を指導したセポイは別だった。彼等は忠誠を誓って軍隊に入り、そして裏切ったのだ。だから彼等は裏切り者だ。反乱者などではない。忠誠を裏切った裏切り者以上に軽蔑すべきものはない。そして今のように困難なときにそれが起きたなら、君も、それが口にできぬほどひどいことであると、思うだろう？」とアルジャンに問いかけたのだ。アルジャンが、何か言おうとしたちょうどその時、ハーディがあわててやってきて、日本軍の自動車部隊がやってくるという。それを聞いたバックランド中佐は落ち着いて、命令を下す。(TGP, p.445-446)

バックランド中佐の言葉の意味

ここでバックランド中佐は、インド軍将校の間でインドのイギリスからの独立が議論されていることに触れ、植民地支配による世界市場の支配というやり方が、植民地の人々の抵抗の高まりにより、今や不合理なものに転嫁しつつあり、アメリカの主導する自由貿易政策の時代が訪れつつあるとして、より広い、世界史的变化のなかで、インドの独立をとらえているのだ。ゴーシュは、知的で柔軟な心を持ったバックランド中佐の言葉を借りて、インド独立の要因としてのインド兵のイギリス軍への忠誠心の喪失を重視するバスキの見方に、軍事的支配による他国の支配という時代からの世界史的転換の時代が訪れた、という視点を付け加えていると言えよう。

バックランド中佐の矛盾

だが、日本軍との戦闘において、イギリスへの忠誠を最後まで守るようと言うバックランド中佐の見解には、矛盾があり、説得性を欠いている。中佐自身もインド兵が金で雇われた存在であることを知っており、アルジャンが、傭兵と呼ばれて感じた腹立ちを理解できなかったことはすでに触れた。だから、イギリス兵が国に忠誠を誓った場合と、金で雇われたインド兵がそうするのは根本的に違うことは知っているはずなのである。にもかかわらず、日本軍との闘いのこの局面においてはイギリスへの忠誠を要求し、さらに、忠誠の宣誓を裏切った場合の処罰を口にする大佐は、露骨に差別意識を言葉に出す保守派以上に、老獪でやっかいだ、と言

えるかも知れない。アルジャンは「それに対して何か言おうとした」とあるが、それがバックランド中佐の言葉への何らかの反論や疑問であったことが暗示されていると読めるだろう。

負傷し、シンに助けられるアルジャン

再び、テキストに戻ると、その直後、バンガローが日本軍の急襲を受け、彼等はバックランド中佐の命に従い、森のなかに隠れるのだが、アルジャンは、日本軍の銃弾を足に受け、排水溝に身を隠していたキシヤン・シンの声に助けられ、彼もそこに身を隠す。最初は痛みを感じなかった足に痛みがやってきて気を失う。(TGP, p. 446-448)

アルジャンは夜中に意識を取り戻す。雨が降っていて、日本軍が近くでピケットを張っているという。弾は貫通していて、包帯をしているので大丈夫とシンは言う。だが痛みがひどく考えることができない。

シンと下水管の中に隠れていると、そのうち痛みが戻ってきて、死ぬかもしれないと思う。シンが必死に励ます。気が遠くなり始めたアルジャンは、失神を防ぐために、シンにお前の村について話してくれという。(TGP, p. 458)

大反乱の後シンの村のシーク教徒がイギリス軍に息子を送るようになった理由

するとシンは、自分が生まれたデリーの近くの小さな村について話始める。一つ自慢があるという。どの家にも、世界から持ち帰ったものが一品はある。何故かと言えば、曾祖父の時代から全ての家は、息子をイギリス軍に送ってきたからだ。1857年の大反乱以来の伝統だという。アルジャンは、反乱とどういう関係があるのか？と聞く。シンは、子供時代に聞いた話をアルジャンに話す。

反乱が終わり、イギリス軍が再びデリーに入ったとき、町で大きな見世物が行われるという噂が広まった。そこで村は、長老たちを先頭に数百人の村人を古都デリーに送った。デリーの後部の門に向かって行進して行くと、デリーの空は鳥で真っ黒になっていた。そして風に乗って悪臭が漂ってきた。デリーに通じる一直線の長い道には、長身の兵士たちが整列しているように見えた。しかし近づいて見ると、それは先の尖った杭に吊り下げられた反乱軍の兵士で、悪臭を放っていたのだ。村に帰ると長老たちは、村のものを集め言った。今日我々は敗者の顔を見た。そしてそれを俺たちの運命にしてはならない。それ以後、村は息子たちをイギリスの軍隊に送るという決定をしたのだ、と父親から小さいときに聞いたという。

だが痛みのなかで、シンの話をよくつかめなかったアルジャンは、「お前の村の連中は恐怖から軍に入ったと言いたいのか？だが、そんな筈はない、誰が強制したわけでもない。お前だってそうだ。何を怖がっていたのだ？」と言う。シンは、「恐怖はみな違います、人間は銃そのもの以上に銃の影を怖がるかも知れない。」と答える。(TGP, p. 458-459)

轆轤ろくろの上で形づくられたシンとアルジャン

一瞬、アルジャンは、シンが、幻想の産物について語っているように思えた。自分を作り変えてしまうような恐怖、世界における自分の位置を変えてしまうような恐怖。そして自分が、作り変えられてしまったことを、もはや意識しなくなるほどの恐怖。こう考え、アルジャンは、突然、ある幻想に襲われる。そのなかではシンとアルジャンは、共に回転する轆轤ろくろの上に置かれた粘土なのだ。アルジャンの粘土は、陶工の手によって次第に形を成し、自らの意思を持つようになり、自分が作られたものであることを忘れてしまうのだ。だが、シンの粘土はいつまでも形をなさず無定形のままであり、壺師とその手から自分を守っているのである。そこに自分とシンの違いがあると思う。そして、教育もなく、自分の動機について無自覚なシンが、自分より過去の重みを意識しているのは何故なのか、という問いを心から消すことができなくなる。

幻想によって形成されてきたアルジャンの人生

そしてアルジャンの心には、自分の人生やその選択が、無意識のうちにある恐怖によって形作られてきた、なんてことがありうるのだろうか、と自分の過去を振り返る。しかし、そこに自分の意思以外の何か恐怖に似たものが介在していた、とは思えなかった。自分が好んで選択した道としか思えないのだった。だが、もし自分の人生が、自分には気づかない力によって形成されていたとするならば、自分が自分の意思で生きてきたことがない、ということになる。本当の自覚というものを、持っていなかったことになる。自分について、前提にしていたことの全てが、嘘であり幻想だったのだ。もしそうなら、自分はどうすればいいのか？（TGP, p. 460）

セポイの反乱の結果、敗北した軍隊への過酷な罰を見て、伝統的に軍人を送り出してきたこのシーク教徒の村は、「敗者の運命を俺たちの運命にしてはならない」と言う村の長老の教えを守り、強大なイギリス軍に兵隊を送ることにしたのだ。そして、その背後には、イギリス軍に歯向かうものを待ち受けている恐怖があったのだ。

アルジャンを将校にしたものとしての「イギリス崇拜」

だが、アルジャンを英領インド軍の将校にしたのは、恐怖ではなかった。それは、イギリスがインドにおいて作り上げたインド統治のシステム全体を何の疑問もなく受け入れてきたからである。イギリスは、インドを軍事的に植民地支配しただけではない。自由・平等・民主主義の政治制度と思想をインドに持ち込み、高い産業・技術力により、鉄道、電信、郵便等のインフラを整備し、支配者の言語である英語で教える大学を作り、イギリスに留学させ、イギリスに絡む全てのものを崇拜する心情をインド人の間に創り出したのである。こうして生まれた「イ

ギリス崇拜」こそ、アルジャンが、イギリスの立場に一体化し、自分の属するインド人部隊がイギリスの為に成し遂げた軍功に心を躍らせた根源にあったものであろう。カルカッタの、祖父が学者の家に育ったアルジャンは、幼い頃からそのような影響の下で育ったのであろう。コレクターがアルジャンの叔母のウマを結婚相手に選んだのも、伝統的で保守的なヒンドゥー教の伝統の下で育った女性ではなく、西洋的な伝統に抵抗しない女性だったからであった。

こうして「イギリス崇拜」的心情によって自分が形成されてきたことに気づいたアルジャンは、これ以後、その影響を断ち切るための闘いに直面するのである。

インド独立連盟の側についたハーディとの再会

このように自分を無意識のうちに形成してきたイギリスの影響に気づいたアルジャンを待ち受けていたのは、日本軍の助けを得てインドの独立の為にインド国民軍を組織しているインド独立連盟との出会いであった。

日本軍は、夜の間に撤退していたので、アルジャンは、シンの助けを借り下水道から外にでた。幸い、太ももの出血は包帯のお陰で止まっていた。二人は歩くうち、インド人・クーリーの居住区にでた。そこの集会所前の広場には、沢山の人が集まっていた。何か尋常ならざることが始まろうとしていたのだ。広場は、盆地のように低くなっていて、周辺をより高い台地に囲まれていた。二人は、広場の周りの高くなったところに腹ばいになり様子を伺った。一台の黒塗りの車が停車していて、そのボンネットのロッドには旗を掲げていた。それは、よく見ると、サフラン、白、緑からなる下地に紡ぎ車をあしらったインド独立運動の旗だった。そして、小屋からでてきたのは、見慣れた軍服を着たハーディであった。ハーディは、シーク教徒の導士の服装をした男と話していた。こうして二人は、喜びの再会を果たしたのだ。(TGP, p. 464)

ハーディは、アルジャンとはぐれた後、二人のインド人ゴム農園労働者と遭遇し、クーリー居住区に案内されたという。そして彼等の中のインド独立連盟のメンバーが、組織の事務所に連絡を取ったのだ。すると車でやってきたのは、かつてインドに戻る途中ウマがペナン島に立ち寄った際、彼女を迎えたインド独立連盟の指導者の一人で、日本軍が空から散布したパンフレットにも署名していたシーク教の智者アムリーク・シン師であった。アルジャンは、ハーディに、「シン師は、我々に何をしろというのか」と聞く。

インド国民軍を率い、イギリスと闘う決意をしたモハン・シン大尉

ハーディは、「モハン・シン大尉を知っているか」とアルジャンに聞く。モハン・シンは、パンジャブ部隊を率いるシーク教徒で、今回の日本軍の侵攻により、アルジャンたちと同様、アスーンへ撤退したのだ。アムリーク・シン師によると、モハン・シンは、以前からインド独

立連盟と連絡を取っていたのだが、今や、大きな決断を下し、イギリス人と手を切り、部下を引き連れ、独立した部隊、インド国民軍（Indian National Army）を結成する決意をしたという。そして、それにパンジャブ人の将校は皆ついて行くという。クマールや他の将校もそこに含まれ、ハーディたちも誘われたと言う。（TGP, pp. 466-467）

インド国民軍と日本軍の関係を巡って議論するアルジャンとハーディ

アルジャンが、「お前もそうするつもりなのか」と聞くと、ハーディは、「俺の考えを、お前は知っているだろう、俺はいつでも、お前と違って、俺の考えを率直に話してきたからな」と笑顔で言った。アルジャンは、「あのパンフレットを書いた男は、日本軍の手先じゃないとどうして言えるのだ」と聞く。ハーディは、「アムリーク・シン師も軍隊に居た。彼は俺の親父を知っていた。彼の出身の村は、俺たちの村からそう遠くはない。たとえモハン・シンが日本軍の手先だとしても、それには理由があるはずだ。それに俺たち自身が、イギリスの最大の手先じゃないか」と反論する。（TGP, p. 468）

アルジャンは、ずっと心の奥底で行っていた自問自答を口に出して話す機会がやってきたことに、大きな安堵感を覚えた。「それじゃ、モハン・シンたちは、日本軍の側に立って戦うつもりなのか」と聞く。「イギリスがインドから出て行くまでな」とハーディは答える。アルジャンは、「日本軍は俺たちをどうするつもりだ？日本軍は、俺たちのことや、インドの独立について真剣に考えているのか？イギリスに代わって、俺たちを支配しようとしているのではないか？」と矢継ぎ早に問いを發する。そして、「やつらはただ、俺たちを利用したいだけだ。それがわからないのか？」と言う。

ハーディは、「もちろんそうだろう。みんなそれを狙っているのだ。ここは考えどころだ。生まれて初めて、上からの命令なしに、俺たちで決断するのだ。」と答える。

支配者としての日本人とイギリス人

アルジャンは、「イギリス人の代わりに、日本人を支配者に迎えてどうなるのだ？植民地支配者としてイギリス人は、まだましな方だ。日本人よりは、はるかにましだ」と言う。

だがハーディは、「いい主人も悪い主人もない。良い植民地支配者の方が、質が悪いぞ。自分たちが奴隷であることを忘れてしまうからな。」と反論し、二人はにらみ合う。（TGP, p.468）

イギリス人のようになろうとした過去を悔むアルジャン

アルジャンは、拳を舌で舐めながら、言う。

「俺たちを見てみる。俺たちは何者なのだ？俺たちはタンゴが踊れるようになり、ローストビーフを、ナイフとフォークを使って食べることもできるようになった。本当のことを言えば、

俺たちの肌の色を除いて、殆どのインド人は、俺たちをインド人だとは思わないだろう。軍隊に入ったとき、インドのこともなんか頭にはなかった。ただ士官殿になりたかっただけだ。そういう連中が、簡単に旗を変えただけで、過去を消し去ることができるだろうか?」。

ハーディは、言う。「俺は単純な兵隊だ。俺にはお前の言うことがわからん。俺にとっては、どちらが正しいか、間違っているかだ。そして、どちらの側につくことに闘い甲斐があるかなんだ」。

そこへアムリーク・シン師がやってきてノックする。兵士たちが説明を待っているという。ハーディは、「シン師が俺たちを連れて日本軍の陣地を通り、モホン・シン大尉のところまで連れて行ってくれるそうだ。もちろんお前はいやなら残ればよい。俺は部下に、俺の考えを話すつもりだ。決めるのは連中自身だ。お前も俺の話を聞きたいか?」とハーディは、言い、アルジャンはそれに頷いた。(TGP, p. 469)

ハーディの演説に歓喜する兵士たち

彼等は集会場に行った。前列に兵士が座り、後部にはクーリーたちとその家族が座っていた。ハーディには演説の才があり、人々は歓喜に震え踊り始めた。先祖の代からイギリス軍に従順に戦ってきたキッシャン・シンもその中の一人だった。アルジャンは、それを見て驚く。あの忠誠心と思えたものは単なる見せかけであったのだ。そして、そのことに自分が何も気づかなかったのは何故だ?そして自分のなかにも同じものがあることに、少しも気づかなかったのは何故なのだ、と思う。

一瞬のうちに、人が自分には他人になってしまう、いや、むしろ逆かもしれない。自分に対し、他人であったことに気づいたのだ。つまり忠誠心や信念が間違った場所に据えられていたのだ。

アルジャンの苦悩

だが忠誠心を繋ぐ筋が切れてしまった今や、自分は、何に忠誠を尽くせばいいのだろうか?古きインドは、とっくの昔に、イギリスが帝国を築くことによって失われてしまった。しかし、今やその帝国も、死んでしまった。アルジャンにそれが理解できたのは、彼の心のなかから、帝国への忠誠心が、消えてしまったからだ。では何に新しい忠誠心を繋げばよいのか。それを考えるのは、彼の能力の限界を超えていた。

演説を終え、勝利の高揚感に興奮したハーディが、アルジャンの前に立、お前は どうする、と聞く。

アルジャンが気になっていたのは、バックランド中佐のことだった。バックランド中佐は、フェアな人間だった。だから、彼を日本軍から逃がす責任が俺にはある、と言い張り、ハーディ

と対立するが、ハーディは、最後にはアルジャンを好きにさせる。(TGP, pp. 467-472)

バックランド中佐との快別

アルジャンは、バックランド中佐がイギリス軍に合流できる方角を指示するが、自分はここに残るという意味を明確にする。そして士官学校でバックランド中佐がイギリス軍の戦史の講義で話したあるエピソードを持ち出す。それはムンローというイギリス軍の将軍が100年前に、「インドの独立を求める精神は、民衆の間で広まるずっと以前に、軍隊のなかで生まれるであろう」と述べたという話だ。中佐がそのようなことを言う真意について、インド人学生は議論したが、アルジャンは、「あなたは、実は、こうなることを予測していたのでしょうか？」と言う。そして、「もし私があなたについて行ったとしたら、きっと私を軽蔑するでしょう」と言ったのだ。

バックランド中佐は、イギリス将校としての立場を守り、「お前は裏切り者であり、軍法会議にかけられるだろう。そしてその時には、俺は、それを見届ける」と言い放つ。それを聞いて初めて、アルジャンは決意を固める。そのような日が来るとすれば、お互い、自分の義務を果たしたことになるでしょうと言い、敬礼する。思わずバックランド中佐も敬礼を返し、二人は別れる。(TGP, p. 479)

アルジャンは、バックランドの最後の言葉によって、自分の心にけじめをつけることができたのだ。

このようにして、日本軍のマレー侵攻とイギリス軍の潰走のなかで、インド独立連盟が英領インド軍将校のモハン・シン大尉に働きかけ、彼を指揮官とする第一次インド国民軍が結成され、ハーディやアルジャンもそれに加わるのである。

ゴーシュが描いていないインド独立連盟と日本の大アジア主義との関係

ガダール党のラーシ・ビハリー・ボーズが、1916年に日本に亡命し、大アジア主義者の頭山満に匿われ、東京にインド独立連盟の支部ができていたことは、すでに述べた。だが、大戦勃発のこの時期にどのようにして、インド独立連盟と日本軍との連携関係が生まれたのであろうか？そして、それはどのようにして第二次インド国民軍の結成に結びついたのか？それについてゴーシュはこの小説のなかで描いていないので、先に紹介したバスキに依拠し、紹介しておこう。

第二次大戦勃発直前にインド独立連盟に注見した日本の諜報部

1930年代に入り、ガダール党員の多くが、政治難民として、イギリスの力が十分に及ばないタイのバンコックに本拠を移した為、バンコックはインド人の不満を結集したセンターとなっ

ていた。

日本が、第二次大戦に突入した1941年に、日本の諜報部が最大限利用しようとしたのは、このインド独立連盟の運動であった。

当初、日本政府は、1937年に始まる日本の中国侵略にインド国民会議が反対した為、そのような考えは持たなかった。しかし、日本は、ビルマ侵攻立案にあたり、ビルマの革命家を利用する計画を1941年6月に立てていた⁶⁾。ちょうどそのような時、インド独立連盟のプリタム・シン師が、バンコクの日本大使館を訪れ、インドの民族主義者の協力を申し出たのであった。日本の諜報部は、その提案に大いに関心を持った。東南アジアのインド人人口は3百万人を超えていた。これは日本の差し迫った侵攻に大いに役立つ可能性があったのだ。(Baski, pp. 81-82)

藤原機関の立ち上げ—参謀本部と藤原の思惑の乖離

日本軍の諜報部は、開戦直前の1941年の秋に、藤原機関を立ち上げた。若く献身的な諜報将校であった藤原岩市は、インドの独立を強く支持していて、かつ、彼の任務には自由裁量の余地が多く与えられ、自由に動くことができたのだ。日本軍の参謀本部は、諜報活動を情報収集やインドにおける軍事基地の攪乱等に役立つとしか考えていなかったが、藤原は、その自由裁量権を生かし、非常に積極的にインドにおける自由を目指す運動を支援した。

つまり、日本軍全体としては、東南アジアのヨーロッパ諸国の植民地における独立運動を、ヨーロッパ列強をこの地域から追い払う為に利用しようとしていたのだが、藤原には、それ以上に、本当にインドの独立そのものを支援しようという気があったのであろう。この点は、以下に述べる日本の参謀本部の状況からも伺える。

1941年の秋、インド独立連盟の東京支部のラーシ・ビハリー・ボーズは、帝国参謀本部に赴き、インド独立への支援を要請したが、参謀本部から何の約束も得られなかった。インドは、大東亜共栄圏構想の範囲には入っていない、ビルマを超えて侵攻する計画はなかったからだ。

日本軍のマレー侵攻にインド独立連盟が協力する協定の締結

1941年10月、日本陸軍のバンコク大使館員の田村大佐は、藤原機関を英領マラヤとタイのインド独立連盟の事務局長プリタム・シン師に紹介した。マラヤには80万人のインド人が居たのだ。藤原は、マラヤ侵攻の際に、インド人社会の協力を得、インド人部隊を日本軍の側に獲得するのをプリタム・シン師が助けてくれるかも知れないと、即座に思った。藤原は、5人の通訳と諜報将校とともに、バンコクに飛んでゆき、プリタム・シン師に集められた9人のインド人とともに、共同作業を始めた。そして、両者は、イギリスと日本が戦争状態に入り、日本軍が、マラヤやタイ南部に侵攻する際には、インド独立連盟は、その地域のインド人住民や

インド兵を反英運動に参加するよう説得し、日本は、インドの主権をいかなる意味でも尊重するという条件で、イギリスとの闘いにおいて相互協力を行う協定書に調印した。

これが、後に独立インド連盟（Independent League of India）となり、モハン・シン大尉と他の将校やパンジャブ部隊を獲得し、第一次インド国民軍の中核が形成されたのである。

プリタム・シン師は、藤原との最初の会見の時から、スバス・チャンドラ・ボーズを連れてくるように要請した。後に藤原は、同様の要請を、捕虜となった軍人からも聞かされた。藤原は、それを帝国参謀本部に報告した。

独立インド連盟のもう一人の指導者は、ヒンドゥー教徒の学者サティヤンダ・ピュリ（Swami Satyanda Puri）であり、彼は、日本に居るラーシ・ビハリー・ボーズと共同で動いていた。（Baski, pp. 82-86）

マレー侵攻の開始と藤原によるプリタム・シン師とモハン・シンへの説得

そして1941年12月8日、日本軍によるマラヤ侵攻が開始され、イギリス軍が敗走するのであるが、そのなかで、マラヤ北部からの日本軍の攻勢を防ぐ為にジトラ（Jitre）戦線に配備されていた1・14パンジャブ部隊は、小説にも触れられているように、日本軍の戦車の攻撃を受け、散り散りとなり、ジャングルのなかに逃げ込み、そこでプリタム・シン師は、モハン・シン大尉と出会い、降伏するよう説得したのだった。

そして説得に成功したプリタム・シン師は、モハン・シン大尉を藤原少佐の下に連れて行った。藤原は日本版の「アラビアのロレンス」であり、「日本は植民地勢力に対し、聖戦を挑んでいる。それは「アジア人の為のアジア」を創る為なのだ、と情熱的に語りかけ、二人の心を動かした。プリタム・シン師は、モハン・シン大尉をインド独立連盟の軍事組織の指揮官に任命し、ジャングルのなかを逃走しているインド兵の命を救うのだと言った。他方、急速に前進する日本軍の捕虜となった兵士を収容する施設が造られ、そこに兵士たちが徐々に入ってきた。そこでモハン・シン師は、その兵士たちに、日本軍の庇護の下、インド独立連盟の軍事組織に入るよう、働きかけたのである。かくして第一次インド国民軍の基礎が築かれたのだ。（Baski, pp. 82-84）

『宮殿』のなかで、負傷したアルジャンが、ハーディとジャングルのなかで再会し、ハーディからモハン・シン大尉がイギリス軍と手を切り、日本軍とともにイギリスと闘う決意をしたという話を聞き、それに同調しようと誘われる場面は、まさにこの段階のことであった。

その後、1942年2月には、シンガポールのイギリス軍も無条件で降伏し、日本軍の捕虜となった4万5千人のインド兵に、モハン・シン大尉やプリタム・シン師が説得し、第一次インド国民軍が結成されるのである。

『宮殿』で描かれたものと、描かれなかったもの

だが、『宮殿』では、その後、モホン・シン大尉と現地の日本人将校との間に生まれたトラブルや相互不信の結果、第一次インド国民軍が解散される経過や、スバス・チャンドラ・ボーズを新たな指揮者に迎えての第二次インド国民軍のシンガポールでの結成や、その後の、デリーを目指したビルマのインパールやコヒマでの闘いそのものは描かれず、終戦直前、撤退するアルジャンの悲劇的な死の場面だけが描かれているのである。

ゴーシュの意図と帝国日本への評価

そのことを読者は、どのように理解すればよいのであろうか？私見によれば、それには二つの側面がある。一つは、ゴーシュの小説家としての最大の目的が、無意識のうちに「イギリス崇拝者」になり、英領インド軍将校の道を自ら選んだアルジャンが、イギリスに利用されていたことに次第に気づき、内面の葛藤を経ながらイギリスと闘う決意に至る過程を描くことにあったという点である。

もう一つは、すでにディヌの日本についての厳しい批判にもあったように、ゴーシュは、帝国日本の戦略が、欧米帝国主義勢力に代わり、日本を盟主としてこの地域を支配することにあり、その為に、この地域の国々の民族主義運動を利用したに過ぎないと見切っていたために、インド国民軍と日本軍との関係を掘り下げるより、むしろ、イギリスと闘い、それまでの自分の人生をつぐないたいと思うアルジャンの生き様に焦点を与えることの方に意義を見出したのであろう。

このように、ゴーシュのテキストには、インドの革命家と大アジア主義を掲げる玄洋社・黒龍会やインドの独立の大義を支持した藤原機関との関係や、現地の日本人将校と第一次インド国民軍指導部との不和、ボーズをインド国民軍の指揮官としてベルリンから呼び寄せようとする動きや、ボーズの東京での東条との会見と、そこで合意点等の記述が欠けているのである。恐らく、日本人のなかには、誠実にアジア人によるアジアを望んだ人々もいたのであろう。しかし、それは日本軍全体の意見とはほど遠く、客観的には、大アジア主義のスローガンは、日本の東南アジアへの侵略行為を美化、合理化する役割を果たしたのである。

日本軍によるラングーン空爆とビルマ支配

再び、ゴーシュのテキストに戻ることにしよう。場面は、ビルマのラングーンである。

1941年12月22日、良く晴れた日の早朝、ラングーンに突如空襲警報が鳴り響き、やがて飛行編隊の音がし、日本軍はビルマのラングーンの要所を攻撃し、その過程でラージュクマールが重慶とビルマを結ぶ道路の建設を見越し、財産を叩いて買い占めた木材も焼失する。そして、長男のニールも爆撃に驚いた象を鎮めようとして象に押しつぶされ命を失う。夫の死に動

転したマンジュは、自分を見失い、泣き叫ぶ赤ん坊の面倒を見ることができない。(TGP, pp. 491-498)

陸路でインドに向かい生き延びるラージュクマールたちと死を選ぶマンジュ

ラージュクマールとドリーは、マンジュと赤ん坊とともにラングーンを離れ、陸地沿いにインドまで歩いて戻る選択をし、北方に向け出発する。その道沿いはインドに向かう人々で溢れていた。彼等は、泥道と飢えに苛まれ、体力と気力の限界に追い込まれる。そうしたなかで、夫を失い、生きる目的を失ったマンジュは、筏から河に身を投げ自殺するが、ラージュクマールとドリーは、食べ物を求め泣き叫ぶ赤ん坊のジャヤを連れ、カルカッタのランカスカ屋敷の門に命からがら辿りついたのであった。門で彼らを迎えたのが18歳になったベラであった。他方、ウマは、ガンディーが「イギリスよ、去れ」運動を始めた1942年に警察に逮捕されたインド国民会議のメンバーの一人だったが、病気で釈放されランカスカ屋敷に戻っていたのだ。(TGP, pp. 500-512)

この時、赤ん坊であったジャヤが、後に、インド写真芸術を専攻する大学教員となり、ビルマで芸術写真家となった叔父のディヌの消息を求め、軍事独裁政権のもとでアウン・サン・スーチーを先頭に民主化運動が静かに進行するミャンマーを訪れるのである。

インド国民軍のその後

インド国民軍についてのニュースがインドに届いたのは、1943年の後半になってであった。しかし、これは、マラヤの北部でアルジャンが参加したものとは違っていた。最初のインド国民軍は、結成から約一年後、日本軍に乗っ取られるのを恐れたモハン・シン大尉によって解散されていたのだ。インド国民軍は、1943年6月にスバス・チャンドラ・ボーズによって再興され、活気づいた。アルジャンやハーディ、キシヤン・シンと言った軍人たちや、イロンゴ等のインド人移民労働者たちも皆これに参加したのである。(TGP, p.512)

戦後、インドで英雄として迎えられたインド国民軍の指導者たち

戦争が終わると、彼等は戦争捕虜としてインドに連れ戻される。イギリスの側からすれば彼等は日本軍に味方した裏切り者であった。彼等以外のインド軍は、連合軍の一環として最後まで各戦線で闘い続けたのであった。しかしインドの世論は、まったく別の見方をした。彼等にとって帝国主義とファシズムは双子の悪であり、捕虜たちはインドでは英雄として迎えられたのだ。(TGP, pp. 512-513)

イギリスによる国民軍の指導者の裁判

1945年の12月、植民地政府は、「赤い砦の三人衆」と呼ばれた「インド国民軍の三人の指導者を告訴した。しかし、それは全国規模の大反対運動を呼び起こし、人々は、カルカッタの市庁を数日の間占拠し、ボンベイでは水兵の反乱がおき、インド国民会議が勢力を取り戻すまたとない機会となった。

裁判では、王にたいし戦争を挑む支配された人種への告発という嫌疑しかなかった。そして彼等の大義には、国際法上認められたいくつも前例があったのだ。

イギリス自身もオットマン帝国に抵抗するギリシャ人の反抗を支持したことがあった。にもかかわらず、三人は終身に渡る流刑の判決を受ける。しかし、結局、減刑の上、解放され歓喜する群衆に迎えられたのである。(TGP, pp. 513-514)

アルジャンの死を告げるハーディ

ハーディも、この時期には国民的英雄として迎えられ、後にインド政府の大使や高級官僚となるのであったが、ジャヤの祖父母に会いにカルカッタにやってきた。そしてアルジャンは、ビルマ中央部でのインド国民軍の最後の闘いの局面で、英雄として死んだと伝えた。それで充分だった。だがその真相は、実は悲劇的なものであった。(TGP, pp. 514-515)

ゴーシュは、その後のアルジャンの姿を、マラヤからビルマに向かったディヌを通して次のように描いている。

日本軍のラングーン占領と新しい政府の樹立

ディヌは、アリソンの死後、マラヤを発ち、漁船で海岸線をたどりビルマに戻った。北のラングーンに陸路で行きたかったのだが、その頃には日本軍の侵攻は本格化していて、北へのルートは遮断されていたのだ。

日本軍の地上部隊には、少数の「ビルマ独立軍」のメンバーが付き添っていた。このグループを率いていたのは、ラングーン大学でのディヌの知り合いでもあったアウン・サンであった。日本軍のラングーンに向けての侵攻とともに、地元の連合軍派のキリスト教徒を始めとする人々との血なまぐさい戦闘が始まり、ディヌは動けなかった。

ディヌが、ラングーンに着いたのは、1942年の6月であり、街は日本軍の占領下にあった。ディヌは、知り合いを通じ、家族が北のヘイ・ゼイディー (Huay Zedi) に向かったことを知る。

ラングーンの北部では、日本軍と撤退するイギリス軍との間で、戦闘が続いていた。日本は、ラングーンに、ビルマ人の政治家バー・モー (Ba Maw) 博士の指導のもとに、新しい政府を樹立していて、アウン・サンを始めとする「ビルマ独立軍」に属する人々が、この政府に入っていた。その幾人かは、ラングーン大学のときのディヌの知人や友人であり、ディヌが北部に

旅行できるパスを手に入れてくれた。(TGP, pp. 549-550)

家族の後を追ひビルマ北部のヘイ・ゼイディーに向かうディヌ

ディヌが、ヘイ・ゼイディーに着いてみると、家族はすでにインドに向かったことや、この地域の住民の共感が連合軍側にあることを知る。ラージュクマールの同業者のビジネスパートナーのド・セイの息子レイモンドに出会う。彼は、連合軍側のパルチザンに入っていて、彼が到着すると突然姿を現し、ラージュクマールたちが、数か月前に、インドに向かったことを知らせた。そこでディヌはド・セイやレイモンドとジャングルのなかに残ることになったのだ。(TGP, pp. 550-551)

連合軍の反撃の開始とアウン・サン連合軍への合流

その後、1944年になると、連合軍は、スリム将軍に率いられた第14部隊を先頭に反撃を開始した。数か月もたたないうちに日本軍は、インド国境地域から押し戻され、1945年の初頭までには一目散に撤退を余儀なくされていた。そして日本軍は、アウン・サン将軍によって、最後の一撃を食らった。アウン・サンは、最初は日本軍と行動を共にしていたが、それは本意でなく、彼は、密かに部下に、日本軍をビルマから追い出す勢力に合流するよう命令を出していた。日本の占領が殆ど終わりに近づいていたことは明白であった。(TGP, p.551)

インド国民軍の残党として戦うアルジャンとディヌの再会

だが、戦闘はまだ終わっていなかった。1945年3月、インド国民軍の一部は、いまだにビルマの中央地域で連合軍と闘っていたのだ。インド人のディヌは、彼が滞在していた村の人々から頼まれ、彼等の村に接近して来ているインド国民軍の残党に、彼等の村に被害を与えないよう仲介してくれと依頼される。(TGP, p. 552)

インド国民軍の残党の指揮官との会談は、ジャングルのチーク材切り出しキャンプで行われた。近づいてきた疲弊した兵士はキシヤン・シンだった。ディヌは、アルジャンは一緒か？と聞いた。するとアルジャンが現れ、二人は、高床の上で話をする。アルジャンの状態は、キシヤン・シンよりも悪かった。だがディヌが持ってきた米を部下に配り、自分は手をつけなかった。誇りがそれを許さなかったのだ。そしてアルジャンは、彼等の部隊は村人には手を出さないと約束した。

帝国に闘いを挑むアルジャン

ディヌは、サヤ・ジョーンズとアリソンが、マラヤで日本軍と遭遇し、サヤが日本軍に撃たれ、アリソンは抵抗し、自ら死を選んだことを告げると、アルジャンは、肩を震わせて泣いた。

それを見て、ディヌは、アリソンを巡る恋敵であったアルジャンに、もはや憐憫の情しか感じなかった。そして彼の肩に手を置き、優しくなぐさめようとするが、アルジャンは、悪夢を振り払おうとするかのように首を激しく振り、「時々、これに終わりはあるだろうかと思うことがある」と言う。ディヌは声に優しさを込めて、「日本軍の側について戦っているのは君の意思じゃないか。日本軍が敗れた今も、どうして闘い続けるのか?」、と聞く。アルジャンは、「君は分っていない。君は俺たちが日本軍に合流したと思っているだろう?だが、そうじゃない。俺たちは、インドの独立の為に闘っているのだ。日本軍にとって闘いは終わったかも知れないが、俺たちの闘いはまだ終わっていない」と言う。

ディヌは、しかし、「(勝てる) 希望はないのを理解しないといけない・・・」、と優しさをこめて言った。希望という言葉聞いてアルジャンは、突然笑い出す。「俺たちが希望を持ったことなど、そもそもあるか?俺たちは、俺たちの生活の全てを形作ってきた帝国、俺たちが知っている世界の全てを彩ってきた帝国に反乱を起こしたのだ。帝国は、俺たち皆を汚した拭い難い巨大な汚点だ。相手を破壊しようとする、自分自身も破壊しなくてはいけないような相手だ。それが俺の今の状況だ」という。

ディヌは、アルジャンを抱擁し、別れた。ディヌの目には涙が溢れ、言うべき言葉がなかった。(TGP, pp. 551-556)

独立の為にイギリスと闘う人々を非難した自分を疑うディヌ

別れた後、一人になってディヌは考えた。アルジャンの言葉聞き、ディヌは初めてアルジャンが成した決断の行きつく先を理解し始めたのだ。ディヌは、彼が知っているアウン・サンのような多くの人々が、何故同じ決断を下したのかを理解したのだ。ディヌは、かつて、日本軍と共に闘うという彼等の決断を断固として非難した自分を疑い始めた。従属的地位に置かれた人々が、国の為に行動したのだと言う時、それを裁くことなどできるのだろうか?同じ国の人々以外に、誰がその愛国心を判断できるだろうか?ディヌは、もはや自分の立場に自信を持つことができなかった。(TGP, p. 556)

インド国民軍から脱走する職業軍人と最後まで戦うプランテーション労働者

ゴーシュは、ディヌのアルジャンとの再会の場面の後、アルジャンが率いる部隊の最後の状況を描く。それは、アルジャンにとって最後の一撃となるのであった。

アルジャンの部隊には当初約 50 名がいたが、今では 28 名しかいなかった。それは敵の銃弾に倒れたからではなく、逃亡によるものであった。彼等の部隊は、インド兵と義勇兵からなっていた。シンガポールが陥落した 1942 年 2 月には、5 万 5 千の捕虜となったインド兵がいた。そのうち半分がインド国民軍に入った。義勇兵はマラヤのインド人であり、その殆どはタミー

ル系のインド人ゴム園労働者だった。彼等は、イギリス軍によって、戦争には向かない人種とされていたのだが、そのような神話が嘘であることが分かったのは、実際砲火に晒されたときであった。タミール系プランテーション労働者たちは、職業軍人より強く、勇気をもっていた。彼の部隊で逃亡したのは皆職業軍人で、プランテーション労働者で逃亡したものは、一人もいなかったのだ。

キシヤン・シンは、職業軍人は、敵軍が彼等の親戚や隣人から成っており、敵側に逃げ込んでも酷い扱いは受けないことを知っていたのだ、とその理由を説明する。

しかしアルジャンは、職業軍人が脱走するたび、その連中が、植民地の支配者から餌をもらい太らされ、甘やかされてきたからだ、とプランテーション労働者たちが軽蔑を込めて話しているのを知っていた。結局のところ、労働者と職業軍人は、別の戦争を戦っていたのだ。（TGP, pp. 559-559）

タミール系労働者たちが最後まで闘った理由

さらに、ゴーシュは、この労働者たちが何故逃亡しなかったのかを明らかにする。アルジャンは、軍事訓練を経て軍人の資質を表し、強烈な個性でタミール人労働者のリーダーとなったラジャンからタミール人労働者について多くを学んでいた。他のタミール労働者とは違い、ラジャンとはヒンディー語が通じたのである。

彼等の多くはマラヤの農園で生まれ、インドを見たことがなかった。彼等がインドについて知っていることと言えば、彼等の両親から聞いたことだけであった。彼等を見たこともない祖国、彼等の両親を追い出した国の為に関っていたのである。にもかかわらず、彼等は、どうしてあのような情熱を持って戦うことができたのか、その動機は何なのかとアルジャンは、考える。

その動機の一つは、彼等が強いられた労働形態にあった。彼等は、英語の「奴隷」という言葉をよく使った。それは、彼等がプランテーションで強えられる労働の事だった。彼等の行動は、逐一、絶えず監視され、見つめられ、管理された。どれだけの量の肥料を、土のなかの穴にどのような間隔で正確に入れるのか、あらゆる動作ごとに見張られ、細かく管理されていたのだ。動物のように扱われていたというのではない、とラジャンは言った。動物にだって、本能に従って動く自由がある。俺たちは、心を奪われ、時計仕掛で動く機械にされたのだ。それほど酷いことはないと言った。（TGP, pp. 559-560）

ゴム園労働者にとってのインド

アルジャンは、彼等にとってインドとは何なのかと考えた。その自由の為に命を懸けて闘っているインド、彼等が見たこともないインド。彼等は彼等の両親が後にしたインドの貧困、飢

え、高いカーストの人々が住む井戸の水を飲めないことを知っているだろうか？そうしたものを経験したことがなく、想像さえできなかったのだ。インドは、地平線の彼方の輝ける山々、救いの儀式、自由の象徴だったのだ。国境を越えた時、彼等は何を発見するのだろうか？とアルジャンは、考えるのであった。(TGP, p. 560)

ゴム農園労働者の目に映るアルジャン

アルジャンが、彼等の目に映る自分の姿を想像したのは、そのような問を発する行為においてであった。

彼等にとって自分は職業軍人、言い換えれば金の為に雇われてきた過去を持ち、そしてその汚れと、それに伴う冷笑主義、虚無主義を決して捨て去ることのできぬ存在。アルジャンは、何故、彼等が自分を蔑んだ眼差しで見つめるのかがわかった。イギリス植民地のゴム園で奴隷のように働かねばならない彼等は、インドに、そのような体制からの解放の夢をこめて、この戦争を戦っていたのに対し、自分はそのような体制を守るために戦ってきたのだ。だから彼等は自分を軽蔑しているのだと思った。(TGP, p. 561)

キシヤン・シンが脱走したとき、連れ戻したのもラジャンであった。そして、どうするのだ、とアルジャンに迫った。手続きを踏んで軍法会議にかける、それが軍隊のやり方で、町のギャングとの違いだとアルジャンは、言った。

シンは有罪となり、タミール人に銃殺を命じたが、誰も撃とうとはしない。そして職業軍人がやれという。これは反乱だとアルジャンは思うが、成す術もなく、アルジャンは、弱り切ったキシヤン・シングを自らの手で脱走の罪で銃殺に処したのだ。それは、帝国の輻輳^{ろくろ}で形創られた自分のような醜い存在にシンになってしまうことから守るためだ、とアルジャンは、自分に言い聞かせる。(TGP, p. 564)

アルジャンの最後

ディヌの知らせを聞いた村人たちは、喜んで村に戻り、ド・セイは彼に住む処を与えた。やがてレイモンドがやってきてアルジャンの死を知らせる。インド軍に居所を知られ、攻撃を受けたのだ。居所を知らせたのは、アルジャンのかつての部下で、脱走兵の一人だった。アルジャンの部下は全員逃げ出していて、彼は一人だったという。インド兵が投降を勧めたが、彼はインド兵を罵り、発砲しながら姿を現し、死ぬことを選んだのだ。(TGP, pp.564-565)

こうしてアルジャンは、文字通り、自分を破壊することによって、帝国に絡めとられてしまった自分の人生に決着をつけたのだった。

まとめ

このようにして、ゴーシュは、自らの意思で英領インド軍の将校の地位に就いたアルジャンが、実際に海外の戦場に派遣されるに及び、様々な局面を通じ、インド軍の帝国の傭兵としての客観的な姿を知り、自分の人生が帝国の轆轤（ろくろ）によって形成されて来たことに気づき始め、そのような自分の人生への取り返しのつかない悔恨と自己否定の気持ちから最後には帝国との望みの無い闘いに人生の最後を費やす悲劇的な姿を描いたのである。

注

- 1) Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/B._R._Ambedkar
- 2) 「黒龍会」は玄洋社の海外工作部隊と言われ、海外ではこの名前で知られる。黒龍会は、「アジアをアジア人の手に」というスローガンを掲げ、ヨーロッパ諸国の植民地支配のもとに置かれていたアジア諸国を、アジア人のもとに取り戻す為、各国の民族主義的運動を庇護する活動を行っていた。そして第一次世界大戦後の講和会議において、日本政府が、国際社会において人種差別を禁止するという提案をした背景には、黒龍会の積極的な働きかけがあった、と言われている。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BB%92%E9%BE%8D%E4%BC%9A>)
- 3) 頭山満、「日本の世界に対する大使命」、『アジア主義者たちの声（上）—玄洋社と黒龍会』書肆心水 2008年)
- 4) Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/Saya_San
- 5) ゴーシュは、ここまでしか書いていないが、アウン・サンは、アジアからヨーロッパの植民地主義を一掃しようという日本の構想に共感し、日本からの武器援助を求め、日本軍のビルマ侵攻時には日本軍と行動を共にし、臨時政府に入閣するのだが、後に日本がアジアを真に解放するのではなく、自分が支配しようとしていると判断すると、反旗を翻し、日本軍と闘い、「ビルマの独立の父」と讃えられるのである。(Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/Aung_San#Struggle_for_independence)
- 6) 『宮殿』のなかでアウン・サンが突然姿を消し、後に日本に向かったのは、このような計画の結果であった。

引用文献・メディア

Bakshi, GD, *Bose: an Indian Samurai*, KW Publishers Pvt Lid, 2016.

Ghosh, Amitav, *The Glass Palace*, Ravi Dayal, Penguin India, 2000.

本論では、Harper Collins Publishers eBook版（2001）をテキストに使用した。

（日本語版翻訳 アミタブ・ゴーシュ、『ガラスの宮殿』小沢自然 小野正嗣 訳 新潮社 2007年）

*本文中の人名表記は、翻訳を参考にした。ただし、本文中のテキストの要約や翻訳は筆者の責任である。

— *The River of Smoke*, Penguin Group, 2015.

Kanwal, Rahul, "Attlee told Bengal governor, Netaji, not Gandhi, got India freedom, claims book,"

India Today, New Delhi, January 25, 2016 | UPDATED 13:35 <http://indiatoday.intoday.in/story/exclusive-attlee-told-bengal-governor-netaji-not-gandhi-got-india-freedom-claims-book/1/579741.html>

Mishra, Pankaj, *From the Ruins of Empire: The Revolt against the West and the Remakings of Asia*, Penguin Books, 2012.

NHK ETV 特集 「漱石が見つめた近代～没後 100 年 姜尚中が行く」 2016 年 12 月 3 日（土）午後 11 時 00 分（90 分）放映

頭山満, 『アジア主義者たちの声（上）—玄洋社と黒龍会』 書肆心水 2008 年

本田毅彦, 『インド植民地官僚—大英帝国の超江リートたち』, 講談社選書メチエ, 2001.

夏目漱石, Kindle 版 夏目漱石全集 『三四郎』, location38041/119798, 有限会社インクナブラ, 2014.

Bose, Sugata, *His Majesty's Opponent*, The Belnap Press of Harvard University Press, 2011.

エリック・ヤッフエ, 『大川周明と狂気の残影』 樋口武志訳 明石書店 2015 年

（加藤 恒彦, 立命館大学国際関係学部教授）

A Study of Amitav Ghosh's *The Glass Palace*: Why did Arjun, an Indian Army Officer, Join Indian National Army?

The Glass Palace is an Indian historical novel depicting life-histories of three generations of Indian, Burmese and Chinese people in India and Burma as well as in Malaya from the late 1890s until 1998. However, this paper mainly concerns the stories of the first and the second generations focusing upon British colonial rule as well as how it collapsed with the rise of both internal and external independence movements during World War II.

For that purpose, firstly, this paper will follow the footsteps of a former wife of an Indian Collector, Uma, who, after the suicide of her husband in the early 20th century, chose to join the Indian Independence League in the United States, an organization that had many supporters among the Indian inhabitants in South-East Asia. Secondly, this paper will trace the trajectory of Arjun, a nephew of Uma in Calcutta, who, in contrast to Uma, chose to join the British Indian Army as one of the first generation of Indian Officers in the middle of the 1930s, when British rule in the region was being threatened by Nazi Germany as well as the Japanese Army.

This paper analyzes how Arjun, who was at first proud of being part of the British Army, as an Indian officer among those who called themselves the first real modern Indians who ate the same food as and acted together with English officers, begins to have many doubts about his decision and his identity as an Indian officer in the British Army.

These doubts become more and more serious when the battalions are sent abroad to Malaya to counter the imminent attack of the Japanese Army on Singapore in 1941. Arjun finds that Indian soldiers are discriminated against by the Europeans in Malaya, and despised by the local inhabitants as mercenaries, an army well-fed by the British to maintain British rule and Britain's interests in the region.

As the battle with Japanese Army starts and the British army is put to rout, Arjun is shot by the Japanese Army, suffering a leg wound during the flight through the jungle, and is helped by his orderly Kishan Singh, a Sikh soldier. Singh tells him an old story about how Sikhs in his village

decided to send soldiers to join the British Army after they saw the horrible treatment the defeated army suffered after the Great Rebellion in 1857.

Reflecting upon Singh's story of how fear of the British Army led Sikhs to join the British Army, Arjun begins to think about how he himself was unconsciously caused by the British to identify himself with the British, and as a result, to lose sight of his real self as an Indian subjected to British colonial rule. Arjun regards this painful process as the burden of self-reflection and begins to look back at his past with deep regret.

Then he happens to encounter one of his fellow Sikh officers, Hardy, in the Coolies colony, and discovers that Hardy has decided to change sides and join the Indian National Army organized by the local Indian Independence League to fight for Indian independence. Arjun's deep regret about how he allowed his life to be unconsciously controlled by the British against his own interest as an Indian, makes him fight to a tragic death at the end of the war.

Concerning the collaboration between the Indian Independence League and the Japanese Army, this paper provides additional historical information about the relationship between the Indian Nationalists and Japanese "Pan-Asianism." It also cites a view from a recently published book, concerning the historical significance of the rebellions in the Indian Army after the War as the determinant factor for Indian Independence.

(KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)